

愛知医科大学学報



令和5年度医学部卒業記念品
石のテーブルとイス
(レストランオレンジ前芝生)



令和5年度看護学部卒業記念品
非常用ポータブル電源充電用ソーラーパネル二点
(医心館防災備品設置スペース)

(関連記事14頁)

＝ 第174号 ＝
2024.4月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

就任ごあいさつ(所信表明)	2
令和6年度入学式	8
令和5年度卒業証書・学位記授与式	11
令和6年度予算大綱	16
教授就任インタビュー	32
退職を迎えて	35
看護学教育評価認定	38
大学病院の中央診療部に新たな部門設置	57
教育・研究最前線	76
Smile ～スマイル～	78



—愛知医科大学の更なる 発展をめざして—

学長 祖父江 元

この度は、令和6年4月1日付で学長を拝命致しました。誠に身の引き締まる思いでございます。新たな人への展開をと思っておりましたが、図らずも、今までの4年に引き続いて2期目の2年の任期と言うことで、ごあいさつとともに所信表明を述べさせていただきます。今までの継続発展の部分と新たな立ち上げのテーマの部分がありますが改めてごあいさつを申し上げます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

中期目標・中期計画の策定

愛知医科大学は、患者さんから、地域・社会から、受験生・学生から、企業から、国や国際コミュニティから、更には職員から選ばれる大学を目指しています。これを実現し魅力ある未来に繋げていくために、この4月に今後5年間の中期計画（令和6年－令和10年）を策定しました。これは前回の中期計画（令和元年－令和5年）に繋がるもので、①財政基盤の確立、②部署別中期目標の策定と評価、③働き方改革の実質化、④地域医療の革新：循環型診療システム・リハビリ改革・救急体制の実質化、⑤世界を見据えた教育・研究の推進、⑥DX推進による経営改革の六つの重要事項をイノベーション・ストラテジーとして展開していきます。この中期計画が今後の抱負の中心でありまして、詳細は、ホームページに掲載されていますので、ご覧いただければありがたいと存じます。ここでは、この中期計画を踏まえながら、主なものについて述べます。

継続事業の発展

創立50周年記念事業につきましては、令和3年4月に開院した岡崎市の愛知医科大学メディカルセン

ター（分院）は、質の高い地域の中核病院として地域医療に貢献しており、また、今後は若い医師を育てる「教育病院」として拠点化させていきたいと考えております。令和4年7月に開院の愛知医科大学眼科クリニックMiRAIは、株式会社メニコンとの近視進行抑制事業と眼科日帰り手術ラボを中心に、順調に発展しています。日本造血細胞移植データセンターは、令和4年1月に移転開設され、全国350施設からの患者データを集積・解析しており、現在12万例を超える全国の血液疾患患者データを有しています。

学生さんの修学環境として、医心館のセミナー室拡充、スターバックスの誘致、レストラン「オレンジ」の改修は終了しており、いずれも盛況に利用されています。

教育の推進

医師国家試験対策として、外部講師を含めた個別指導コーチングシステムを導入しており、令和4年度の医師国家試験の新卒合格率は開学以来初の100%、令和5年度は98.3%と高い合格率を維持しております。また、看護師国家試験は、この数年間99～100%をマークしています。入学試験で良い人材をリクルートすることが重要で、新たに医学・看護学共通のアドミッションセンターを立ち上げつつあります。キャリアパスに根差し、どのような医師・看護師を育てるのかを考えていきます。

特に、医学教育改革の中で重要なのは、急性期高度先進医療とともにGP（General Physician）としての視点が持てる医師が求められています。この教育改革を実践するため、卒前から卒後まで一貫したシームレスな教育体制の構築とともに、専修医の救急医療参加及びメディカルセンターをGPの実践

教育の場として活用を進めたいと思います。

看護学部・看護学研究科では、NP（診療看護師）の育成が進展してきており、本学での研修や臨床での位置づけなど全国的にも注目されています。更に、来年度には、看護学博士課程の設置が予定されており、この中でもDNPコースが、注目されています。

研究の推進

研究創出支援センターのバイオバンク部門が充実してきており、AMEDのバイオバンクリストに、私立医科大学としては最初に登録され、がんを中心に検体の蓄積が進んでいます。加齢医科学研究所では6千例を超えるブレインバンクが構築されており、脳研究の世界的な研究基盤になっています。先ほど述べました日本造血細胞移植データセンターや、その他ALS、前立腺癌、肺胞蛋白症、睡眠・痛みなどでも世界的なバイオリソースがあり、本学は、このような大規模なバイオリソースをベースにした解析研究基盤が備わっていることから、今後の重要な拠点としての発展が期待されると思います。

診療の展開

地域がん診療連携拠点病院及びがんゲノム医療連携病院に指定されており、今後更にがん医療を推進したいと思います。

地域医療の中でも救急医療は中核ですが、積極的に救急体制の改革に取り組んでいます。救命救急科の常勤医師の増員、各科専修医の救命救急科への3か月間の学内外出、救急管理棟の開設、経過観察病棟（TACU）の開設に加え、愛知県から重症外傷センターの指定を受けてハイブリットERを設置しています。

更に、急性期・回復期・生活期リハビリのニーズに応えるため、令和3年にリハビリテーション講座を設置し、分院とも協同してセラピストの増員に努めております。また、リハビリ治療技術の高度化・先進化・地域連携化など、新時代のリハビリ医療・教育の充実に向けて、現在、新たなリハビリセンターの増築工事が進んでおります。また、ゆくゆくはリハビリ学部の開設を目指したいと考えております。

DX改革は、診療だけでなく、大学・病院のあら

ゆるところに必要ですが、現在進行中の働き方改革と相まって、診療面で特に重要と思います。DX改革によって働き方或いは医療そのものも変化してくるのではないかと考えています。

働き方改革の実質化

今まさに医師の働き方改革が始まっており、勤怠管理の徹底、変形労働時間制の導入、兼業の外だし、時間外勤務の扱い変更、移行緩和措置の設定など大きな変革が進んでいるところです。最終的には、医師に加えて看護師を始めコメディカルの勤務体制・ワークシェアリングなど、臨床に関わる職員全体のチーム医療に向けた、やや時間をかけた変革が必要だと思います。

今後の人材育成

教育・研究・診療の全ての分野で、更なる発展を目指すには人材育成が重要なポイントであります。歴史ある私立医科大学を見ますと教授の半数以上が自学出身という大学が多く、愛知医科大学も今後、本学出身の教授が多く輩出されることが重要であり、このことが人材の育成とリクルートに繋がり、大学の発展に大きく寄与すると思います。

財政基盤の発展

もう一つのポイントは財政基盤の発展です。約4年にわたる新型コロナウイルス感染症への対応を終え、アフターコロナ時代を迎えることとなります。令和元年以降のコロナ時代には、コロナ対応支援や診療のコロナ手当など大きな支援もあり、確実な経営により黒字化を進めて参りましたが、一方でこの期間には、本学の更なる発展に向けた様々なイノベーションの仕込みを行ってきました。ただ、これらがその花を咲かせるのは、今年から来年以降にかけてであり、今年は、そのための踏ん張りどころの1年となります。皆さまの更なるご支援をいただけたらと思います。

最後となりますが、愛知医科大学の発展には皆様のご支援・ご協力が不可欠でございます。更に、本学の発展に努めて参りたいと存じますので、今後ともお力添えの程、宜しくお願い申し上げます。



—医学部の更なる発展を期して—

医学部長・医学研究科長 笠井 謙次

引き続き、令和6年4月から2年間の医学部長・医学研究科長を拝命致しました。誌面をお借りして一言ごあいさつ申し上げます。

人口減少社会、超高齢社会に移行した日本においては、社会が求める医療の在り方そのものが大きく変化しています。更に医師過剰状態が議論され、今年度からは医学部入学定員数の調整が始まろうとしています。その中で、大した特色がなく他大学で代替可能と判断された医学部や、教育研究において実績を上げられない医学部は、社会から不要と判断され、選別の対象になるかもしれません。そのため、今後も本学と卒業生が生き抜くためには、しっかりと実績を挙げつつ、我々は何者であるか、何をしたいのか、何処を目指しているのかを問い直し、本学独自の地位を確立する必要があると考えます。50年前の「新時代の医学知識、技術を身につけた教養豊かな臨床医、特に時代の要請に応じて地域社会に奉仕できる医師を養成し、あわせて医療をよりよく発展向上させるための医学指導者を養成する」という建学の精神を今日の状況に則して捉え直し、次の半世紀に向けて「他大学ではなく、なぜ愛知医大なのか」、本学の在り様を明確にすることが必要です。そして、そうした愛知医大ismを具現化するための学生募集、教育プログラム、人材育成、研究開発、地域連携、更には積極的な広報活動が重要であると考えます。

令和5年度までに学部教育に関して、密な国試対策を実施しつつ、「出口」である総合試験や「途中」で重要な学修支援や進級判定、精神心理的サポート体制などを整えてきました。また「入口」として令和6年度新入生からは、新モデル・コア・カリキュ

ラムに対応しつつ、学生に自律性や自己管理を求め、高校生・受験生からの「大学生化」を促す新しいカリキュラムを用意しました。当然の事として優れた進級率や国試合格率を維持しつつ、単に6年間勉強だけさせるだけではなく、研究活動、海外研修やクラブ活動、ボランティア活動など青年期に相応しい様々な経験を通じて学生が自ら考え、自己を研鑽し、品格のある医療人として成長すること、新カリキュラムを通じてその種を撒きたいと考えています。また、医師の働き方改革も相まって、我が国では大学の研究力低下が問題視されています。本学でも研究者個人の研究力向上を図るとともに、大学として「愛知医大らしい」研究を先鋭化させなければなりません。従来から継続してきたブランディング事業を通じて地域医療と臨床研究を連携させることや、出口戦略を見据えた基礎研究を推進することなどが鍵になると考えています。更に、各種補助金事業への意識化や情報環境整備、震災への備えなど様々な体制の再確認や整備も必要です。しかし、これらはいわゆる役職者のみでできることではありません。「全員野球」、「One for all, All for one」などと表現されるように、各々が常に社会にアンテナを張り、学内議論を活発にして皆で将来の愛知医科大学医学部の姿を作っていくことが必要だと思っています。

学生や教職員、関係者の皆さまの更なるご支援をどうぞ宜しくお願い致します。



—20年以上積み重ねてきたことを 基軸とした新たな取り組みへの挑戦—

看護学部長・看護学研究科長 若杉 里実

令和6年4月から2年間の看護学部長・看護学研究科長拝命に当たり、ごあいさつ申し上げます。

社会情勢が複雑に変化し将来の予測が困難な時代になりつつある中、看護専門職者に求められる場は拡大し、役割も多様化してきています。

看護学部は、令和2年度に創立20周年を迎え、多くの優秀な看護師・保健師を送り出してきました。

令和4年度からは新カリキュラムをスタートさせ、教育理念としては、人間尊重を基盤とした豊かな人間性（Humanity）、社会と人々の暮らしや健康を支える地域性（Community）、国内外の多様な文化と価値観を尊重する国際性（Internationality）、社会の変化や多様な状況・場に対応できる看護実践能力（Professionalism）の四つをコア・コンセプトと位置付け、看護の発展に貢献し続ける実践者の育成を目指しております。令和5年度は、一般財団法人日本看護学教育評価機構（JABNE）による看護学教育評価を受審し、「適合」という総合評価をいただきました。

看護学部長・看護学研究科長としての2年間にける新たな取り組みを4点、ご説明申し上げます。

第1に看護学部では、日本看護学評価機構による看護学教育評価内容から改善すべきことを具現化するとともに、令和6年度中に提示される看護学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂内容と新カリキュラムとの整合性を確認し、より良い教育の実現を目指していきます。

第2に看護学研究科では、博士課程としてPhDコース（Doctor of Philosophy in Nursing）とDNPコース（Doctor of Nursing Practice）の2コースを令和6年3月に設置申請致しました。DNPコー

スは、実現すれば全国四つ目の設置大学となります。学部から大学院まで看護職としての学びを継続し、キャリアアップに繋げることができるよう、博士課程の設置に向けた準備を更に進めていきます。

第3に看護実践研究センター（キャリア支援部門及び地域連携・支援部門の活動）と臨床の看護部と教育の看護学部が連携した看護連携型ユニフィケーション推進事業の活動内容を見直し、看護実践と研究をより活性化していくことができる新看護実践研究センターとしての運営体制を検討していきます。

第4に看護学部の教職員一人ひとりが中長期的な視点で自己のキャリアビジョンを描き、より主体的に自らの役割を理解・実践することができるように、キャリアコンサルタントによる研修会及び教職員の個別面談を組み合わせを行い、体系的に教職員のキャリア形成を支援できる仕組みづくりに取り組んでいく必要があると考えております。

新たな取り組みに挑戦していくには、愛知医科大学関係者の皆さまのご理解、ご協力が欠かせません。ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



—学生部長に就任して—

医学部学生部長 宮本 淳

令和6年4月1日付で、高村祥子教授の後任として医学部学生部長を拝命致しました。私は、平成13年に本学へ赴任した翌年から、学生生活委員として学生生活の支援に携わってきました。

学生一人ひとりが心身ともに健康で快適な学生生活が送れるように、これまでの学生部の先生方及び学生課の方々の取り組みによって充実してきた学生支援を更に向上できるよう努めて参ります。保護者を始めとする関係者の皆さまのご理解とご協力の程、何卒よろしくお願い致します。

教職員による学生支援として、令和4年度から医学部では指導学生制度を導入しています。1学年次生は「初年次医科学セミナー」の担当教員が指導教員となるため、教員と学生との距離が近く、学生が支援を受けやすい状況です。2～6学年次生は、講座単位で複数の学年次を担当する指導講座制度により、教員からの支援・指導に加えて、学年次を超えた学生の交流を深めることのできる体制です。学生アンケートからは、縦の繋がりの広がりや講座行事に参加できることの喜びと、今後そのような機会が更に増えることを期待する声が多数見られます。指導講座制度による交流の活性化及び学生の早期の臨床体験や研究活動の機会の増加に学生部としてサポートできればと存じます。

専門的な学生支援として、学生相談室主任という立場で学生のメンタルヘルス支援に携わってきました。新型コロナウイルス感染症流行により制限されていた対面授業の再開後に学生相談室の利用者数が増加したことに対して、昨年度2名の相談員の増員がありました。これにより、臨床心理士・公認心理師の資格を持った相談員が毎日相談に応じることが可能になりました。

また、学生がより気軽に相談できる窓口として「ランチアワー」を設けることにしました。大学生は悩みが深くなりやすく心を病む可能性が高い世代とされています。相談室に来談する学生の支援に加えて、スクリーニングや心理教育などの予防的介入による支援を進めていきます。

最後に、教育の「育む」という側面において主体性の涵養は重要な課題であり、そのために主体性を発揮できる機会を増やすことが学生の成長へと繋がると考えています。学生生活委員会では、より良い学生生活のためのニーズについて学生が主体的にまとめた提言に対して議論する機会をもつようになりました。令和12年度には、本学が西医体（西日本医科学生総合体育大会）の主管校を務めます。成功に向けて学生が運営する課外活動連絡協議会の活性化を図っていきたいと考えています。コロナ禍の活動制限によって失われたキャンパスライフが回復してきています。学生の主体性による課外活動や医大祭などの行事の活性化を始め、一人ひとりが充実した学生生活を過ごせるように学生の声を基にした支援に尽力して参ります。



—良質な看護を提供できる看護師、 保健師の養成を目指す—

看護学部教務学生部長 泉 雅之

令和6年4月1日付けで、看護学部教務学生部長を拝命しました。私は愛知医科大学を昭和61年に卒業して医師になり、平成3年7月に本学医学部に戻った後、平成31年4月から看護学部にお世話になっています。医学部在任中にも看護学に関する学生教育は、前身の看護専門学校と、看護学部・大学院とを合わせて10年ほど行って参りました。主に疾患の病態やケアを担当しましたが、医学部より限られた講義時間の中でどのように教えていったら良いか、苦心したことを記憶しています。看護学部へ赴任してから5年が経過しましたが、再度この重役を担うことになりました。

看護学部の教育理念は令和4年度に改訂され、建学の精神、設置の主旨、学是（具眼考究）に則り、①人間尊重を基盤とした豊かな人間性（Humanity）、②社会と人々の暮らしや健康を支える地域性（Community）、③国内外の多様な文化と価値観を尊重する国際性（Internationality）、④社会の変化や多様な状況・場に対応できる看護実践能力（Professionalism）の四つをコア・コンセプトと位置づけ、看護の発展に貢献し続ける実践者を育成していくとあります。この理念に基づき、様々な検討課題を三つの委員会、すなわち教務委員会（教育関連を担当）、学生委員会（学生生活関連を担当）、実習委員会（実習関連を担当）で審議し、教務学生部長はこの三つの委員会を統括する立場にあります。それぞれの委員会で活発な議論を重ねた後に、その成果を教務学生部長の責任のもとに看護学部長に答申し、看護学部の教職員や学生に伝達していくのです。

新型コロナウイルス感染症の感染症法の位置付けが5類感染症になってから1年近くが経過し、本学

の活動基準は教育（講義・演習・実習など）、研究活動、学生の入構制限、課外活動、教職員、会議・セミナー、出張・旅行の全てがレベル0（通常通り）となりました。大学構内におけるマスク着用は任意となりましたが、病院施設に入る際や風邪症状のある者は必ずマスクを着用すること、食事の際には黙食を徹底することといった注意事項が学生・教職員に課せられています。看護学部の授業体制については、特別時間割の80分授業から従来の90分授業に戻り、遠隔授業の割合も減少しました。授業で用いられる資料などのペーパーレス化は徐々に進められていますが、この状況に学生も教職員もまだ追いついていない面があります。

一方、昨年は一般財団法人日本看護学教育評価機構による看護学教育評価を受審し、令和6年の3月13日付けで看護学教育評価の評価基準に「適合」していると認定されました。しかし、検討を必要とする課題も示され、認定期間の令和6年4月1日から令和13年3月31日までの間に解決しなければならないところです。その他、中長期的な課題として、世界を見据えた教育・研究活動の充実と発展を目指すこと、研究・教育を担う卓越した人材の育成を行うこと、地域医療・地域貢献を促進することなどがあり、今後の看護学部の更なる発展に向けて取り組まなければならないことは多々あります。

この4月に看護学部へ入学した学生は130名でした。教育の充実と言うまでもありませんが、学生にはキャンパスライフを思う存分楽しんでもらいたいと思っています。私の任務は、看護学部長と共に良質な看護を提供できる看護師、保健師養成を目指して、学生の教育と生活支援の充実に力を入れていくことと考えています。

令和6年度愛知医科大学入学式

医学部・看護学部入学式



令和6年度入学式が、令和6年4月7日（日）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

初めに、祖父江元 学長からの式辞があり、245名（医学部115名、看護学部130名）の新入学生を代表して医学部の川原尚人さんから、「学則並びに諸規則を守り、先生方のご指導に従い、本学学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」との宣誓が行われました。その後、来賓の柵木充明愛知県医師会長、三浦昌子愛知県看護協会会長、富安聡医学部後援会長、富田裕一看護学部父母会長及び福澤嘉孝医学部同窓会長から祝辞が述べられました。

最後に、在学学生を代表して看護学部4学年次生の田村悠衣さんから「入学式を迎えられた皆さまは、本日から医療者への道を歩み出すことに、喜びや希望を抱いておられることと思います。しかし、その

道は決して容易くはなく、ときには困難に直面することもあると思います。そんなときは決して一人で悩んだりせず、信頼できる先生方や仲間に頼ってください。これから医療に携わろうとしている私たちにとって、人との関わりはとても大切になります。学生生活を通して多くの出会いを大切にしつつ、その人が抱える思いを感じとり理解しようと努めてください。思いやりの心を育てていきましょう。長い人生において、大学生活は短い時間に過ぎないのかもしれませんが、今後の進むべき道を方向づける大切な時間でもあります。常に学ぶ姿勢を大切にしながら自分の思い描く医療人へ一歩一歩近づいていってください。」と歓迎の辞が述べられ、午前10時30分頃に式は終了しました。



宣誓を述べる川原さん



田村さんからの歓迎の辞

式 辞

学長 祖父江 元



本日は、医学部、看護学部の入学試験を見事合格され、ここに入学式を迎えられた皆さん、学長として、心よりお祝い申し上げます。新型コロナウイルス

感染症の影響で、ご家族やご来賓の方々にご出席いただく対面式の入学式は4年ぶりであり、新たな気持ちで迎える入学式と思います。

さて、これから皆さんには、それぞれ4年間、6年間の大学生活が待っていますが、何をしようと

思っていますか？色々な将来への思いを描きながら
今皆さんはここにいます。

まず第1には、医師国家試験、看護師あるいは保健師国家試験があります。是非、皆さんには留年することなくストレートで合格して欲しいと思います。去年は医師、看護師、保健師のいずれも国試ともに新卒者100%の合格率でしたが、今年は医学部98.2%、看護学部99%といずれも全国的にも高い合格率でした。更に、Times Higher Educationの大学ランキングでは、教育リソース分野（学生一人当たりの資金や教員比率など）において、本学は日本の全ての大学の中で第10位でした。愛知医科大学の教育レベルの高さの一端を示すものかと思います。

第2には、友達を作ることです。大学の友達は高校時と違い、職業や研究のフィールドが共通しますので、一生の友達になることが多く、価値観も、より多様化してきますので、多様性ということ学びながら友達を作ってもらいたいと思います。

第3には、自分の将来の目標を考えてもらいたい。皆さんは、これから医学医療を担うプロフェッショナルな道を目指す中、自分は将来何を目指そうとしているのか。どのようなプロになりたいか。是非、長いスパンで将来の目標を考えてほしいと思います。自分は何をやり、何になるかを決めるのは難しいことですが、大学時代は一生の中でも又とない機会です。私自身のこととしては、大学生時代や大学院の時代に考えたことが、その後の長い時間の経て振り返ると、無意識にその方向に向かっていました。

皆さんの将来構想にも大きく関わる重要な点として、医学・医療は一定のものではなく、変わりゆくものであるということを少し述べます。私は神経内科医ですが、医学部を卒業し医者になった1970年代は、アルツハイマー病などの認知症は稀な病気であり、なかなか経験できませんでした。それが1995年には100万人となり、近年では700～800万人を超え

てきています。65歳以上の5人に一人が認知症と言われています。この爆発的な増加の一番の原因は、人口の急速な高齢化と言われています。残念ながら、認知症の本当に有効な治療法はありませんでした。

では、医学はこの認知症の大爆発をただ見ていただけかと言うと、そうではありません。昨年出てきたレカネマブという薬は、アルツハイマー病の原因と考えられるアミロイドβタンパク質が脳で蓄積されることを消す薬であり、原因そのものを抑えるという意味で疾患修飾薬（disease-modifying薬）と言われます。これを投与することにより、アルツハイマー病の進行を抑える力があることが分かってきました。しかし、これを投与するには、PET検査でアミロイドβタンパク質が脳に蓄積していることを証明する必要があり、神経症状や種々の検査でアルツハイマー病であることを正確に診断しなければいけません。現在、日本全国でレカネマブの投与ができる病院は、本学を含め200程度認可されています。また、経過をみることが重要であり、中核病院と地域のクリニックにおける年余の連携が必要になってきています。このレカネマブなどの抗体薬は、将来アルツハイマー病の予防にも使えるのではないかとされており、認知症の治療体系そのものが変わってくる可能性も考えられるところです。

もう1点、例えば「がん」についても、私が医者を始めた1970年代頃は、我が国の全てのがん患者数は20万人程度でした。それが今では100万人を超えて、日本人が癌に罹患する確率は2人に1人と言われています。長年がんの治療は、手術・放射線・化学療法でしたが、ここ10年の発展は、ロボット治療を始め、がんゲノム分子標的治療・免疫チェックポイント治療・細胞療法・種々の粒子線治療など急速に発展し、がんは今や治る病気になりつつあります。

重要な点は、高齢化とともに起こってくる多くの疾患、例えば心臓血管疾患、腎疾患、糖尿病・代謝

疾患、免疫・リウマチ疾患、神経難病などは、がんや認知症と同じような状況になってきています。患者数の爆発的增加、慢性進行期・再発期の長期化、病態の変化に伴う症状の変化などが共通しています。何が言いたいのかと言うと、疾患の構造や病態は30～40年の間に大きく変わり得るということです。その病態や症状の変化に伴い、診断法、治療法も疾患ごとに大きく変わってきています。更には、地域医療のシステムや医療・介護の考え方も大きく変わる必要があると思います。将来、どのように変わっていくのかを予想することは難しいですが、疾患ごとの地域医療の変革や発症前・再発前の疾患の

大学院入学式

令和6年4月7日（日）午前9時20分から大学本館711特別講義室において、令和6年度大学院入学式が挙行されました。【写真】

式では、医学研究科博士課程25名、看護学研究科修士課程15名の計40名の新入学生を代表して、看護学研究科の曾離哲也さんから、「学則並びに諸規則を守り、先生方のご指導に従い本学大学院学生としての自覚を持ち、勉学に励むことを誓います。」との宣誓が行われました。

「予防」ということも大きなテーマになってくると思います。これを担い更に次世代・未来に向けて医学・医療を発展させていくことは、皆さんのような若い世代に託されていると思います。本学は、この次世代の医学・医療の発展に向け全力を尽くしていきたいと考えています。

自分は何になりたいか、何が大事かということで将来構想を考えてみてください。これを真剣に考えるということが大事であり、目標は必ず近づいてくると思います。大学生の時代は又とない機会です。

本日は、誠におめでとうございます。皆さまには是非頑張ってくださいと思います。



続いて、祖父江元 学長から告示が述べられ、式は終了しました。

令和6年度職員新任式挙行

令和6年4月1日（月）大学本館たちばなホールにおいて、令和6年度職員新任式が挙行されました。

式では祖父江元 理事長から「これから働く上で、イノベーション・キャリアパス・連携という三つのキーワードが重要になります。皆さまを職員としてお迎えすることを大変嬉しく思うとともに、変革の時期を迎えている本学において、皆さまの若い力にたいへん期待しています。」とのあいさつがありました。

なお、今年度の参加者は245名で、内看護職員185名、医療職員47名、事務職員10名、技能職員1名、



出席者による記念撮影

技術職員2名です。

令和5年度愛知医科大学卒業証書・学位記授与式

医学部・看護学部卒業証書・学位記授与式



令和5年度卒業証書・学位記授与式が、令和6年3月2日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

当日は、参列できなかったご家族を始め、関係者の方々にも式典の模様をご覧いただくことがで

きるようにYouTubeでのライブ配信を併せて行いました。

初めに、祖父江元 学長、笠井謙次医学部長及び坂本真理子看護学部長から、医学部卒業生120名、看護学部卒業生97名の卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記が授与されました。続いて、祖父江学長からの告辞が述べられ、柵木充明愛知県医師会長、富安聡医学部後援会長、福澤嘉孝医学部同窓会長及び富田裕一看護学部父母会長から祝辞が述べられました。

この後、在学生を代表して医学部5学年次生の伊藤嶺奈さんから送辞が、卒業生を代表して看護学部の長田実久さんから答辞が述べられ、午前10時45分頃に式は終了しました。

告 示

学長 祖父江 元



学長の祖父江です。本日は、医学部・看護学部の課程を無事卒業され、ここに卒業式を迎えられた皆さん、それに保護者の皆さん、学長として、心よりお祝い申し上げます。誠にありがとうございます。

この4年間、毎日が新型コロナウイルス感染症との戦いで、本当に大変だったと思います。授業は多くがWebになり、実習もあまりできず、何よりも大学に出てきて友達と会話をするのができなかったと思います。未だ終息してはいませんが5類感染症となり、今回は4年ぶりに来賓、ご家族及び関係者の方々にもご出席いただくコロナ禍前の形式に戻りました。

この卒業式を迎えられたのは、皆さんの努力もさることながら、多くの人の支えがあったからだと思っています。ご家族の方々、先輩や同僚の人たち、教員の方々、そして何よりも実習などで協力していただいた患者さんやその家族の方々など、改めて感謝の

意を表したいと思います。これから皆さんは、社会人として、医療に携わるプロとして、新しい生活が始まります。改めて、この門出をお祝いしたいと思います。

さて、お祝いのあいさつとして医学部と看護学部それぞれの卒業生に期待したいことを述べます。まず、医学部を卒業する皆さんですが、General physicianの視点について述べたいと思います。これから2年間の初期研修を終え、それぞれが志望する領域の専門医研修に入りたいと思います。専門医研修は大変重要ですが、同時に広く患者さんの病状を見るGeneral physician（GP）の視点も是非持って欲しいです。このGPの視点の涵養は、医学教育の重要課題になっています。欧米のイギリス、アメリカ、カナダ、北欧などでは、Specialist（専門医）とGPは学生の時から分かれています。GPはいわゆるFamily Medicineを担う医師であり、一定の地域を任されて、その地域の人々を一生に亘って診るシステムになっており、必要に応じて専門医に紹介することになっています。一方、日本では、ほとんどの人が研修医を経て専門医になります。従って、欧米

と異なり一人ひとりの医師がGPであると同時に、専門医の基盤を持っています。例えば、患者さんを診たときに、どのように各診療科にトリアージすれば良いか、どのように専門医に繋げば良いかという能力が必要です。また、患者さんの高齢化で、一人の患者さんが複数の疾患を持つことが多いことに加え、高齢化とともに疾患の構造は大きく変化し、疾患との共存期間が大変長くなり病態が変化してきています。パーキンソン病を例にすると、私が研修医の頃と比べ有病率はおよそ10倍以上増加しており、経過20年以上の患者さんが大変多くなってきています。パーキンソン症状に加え、認知症、自律神経障害、呼吸不全・循環不全、心不全、腎不全など思いもよらない多彩な症状が出てきます。同様のことは、心不全、認知症、糖尿病、腎不全、リウマチなど多くの疾患に見られていて、しっかりとした治療にはGP的な能力が大変必要になってきているのです。救急などの場面では、正にGPとしての能力が必要です。結局は、自分の専門を超えてフレキシブルに患者さんに対応できる医師としての基本能力ということになると思います。

一方、現在の医学教育が、どちらかと言うと専門医型教育になっていて、GPとしての教育が少ないと言われています。医師個々のGP能力の必要性が社会的にも叫ばれており、現在これを克服する方法が考えられていますが、上手くいっていないのが実状です。本学では、昨年度からこの点を克服するシステムを進めています。一つは全診療科専攻医の救命救急科配属であり、もう一つは特に内科専攻医のメディカルセンター配属です。救命救急科には、様々な診療科の患者さんが受診してきます。専門領域を越えた研修が可能であり、3か月程度の研修を重ねることによって、救急の素養とともにGPとしての視点が備わるのではないかとされています。私自身も、振り返ってみて、GP的な能力の取得は初期研修、後期研修の時期が大変重要と思っています。本学でもそれが可能なシステム作りを進めたいと思っていますが、是非皆さんには、今後の研修の中でこのGPの視点を持つことを心掛けていただきたいです。

看護学部を卒業する皆さんには、まず看護師の職域は近年大変広がっていることを理解してもらいたいです。高度化手術、急性期医療、慢性期医療、地域医療、或いは治験・行政・教育の領域まで医療のニーズに合わせて大きく広がってきています。この

うちNPについて少し詳しく紹介します。

NPは、Nurse Practitionerの略で、従来医師しか行うことができなかった医療行為を一定の条件で行うことができ、手術部、麻酔科、外科領域や内科的領域でも、力を発揮できる看護師です。2年間の修士課程が必要となりますが、欧米などでは医療を進める上で、無くてはならない職種になっています。本学のNPは大きく改革が進んでおり、独立部門としてキャリアパスを作ることができるようになりましたし、給与待遇も大幅に向上しました。また、研修システムもこれまでとは異なる新しいシステムを作りました。また、NPコースの定員を増やすことによって活躍の場が広がり、学金制度も大きく拡張しています。更に、来年には本学看護学部博士課程を創設することを進めており、その中心はNPの博士課程Doctor of Nursing Practice (DNP) です。DNP博士課程の創設は、日本では3校目であり、NPの修士課程と博士課程が揃うことで、本学が日本のNPのメッカになると期待しています。日本におけるNPの役割がどうあるべきか考えられていますが、本学が日本のオピニオンをリードできる立場になることができればと思っています。皆さんには、キャリアパスの一つの例として考えていただけると良いと思います。

いずれにせよ、看護師は患者さんに接する時間が長く、直接の対応も多いことから、医療を進める上で最も重要な役割を担っていると思います。明治時代の医学の父、或いはビタミンの父とも言われた高木兼寛氏は慈恵会医科大学の創設者ですが、同時に日本で最初の看護学校を創ったヒトでもあり、「医師と看護師は車の両輪の如し」という言葉を残しています。今では当たり前の話ですが、明治の時代にこの言葉を残していることが大変素晴らしいと思います。是非、各人のキャリアパスを描いて活躍されることを期待しています。

最後に、これは皆さんへの期待です。皆さんの中から、愛知医科大学の次の世代を背負う人が是非出てきて欲しいと思っています。私は、本学が今後更に大きく飛躍していくことが必要だと思います。そのための基本は、皆さんのような若い力だと思っています。皆さんが成長し、臨床家として、研究者として、或いは実践家として、本学飛躍の担い手として愛知医科大学に戻ってきて欲しいと思っています。

本日は誠にありがとうございます。皆さんの今後の活躍に期待しています。

送 辞

医学部5学年次生 伊藤 嶺奈



冬の寒さも少しずつ和らぎ春の訪れを感じる今日この頃、本日ご卒業を迎えられる先輩方に在校生一同心よりお喜び申し上げます。

愛知医科大学に入学されてから本日に至るまで、日々の勉学を始め、部活動やボランティア活動など様々な経験をすることで、その一つひとつが、皆さまのお心に深く刻まれていることかと思えます。

先輩方が入学された頃は新型コロナウイルス感染症がありませんでした。しかし、ウイルスが流行し、在学期間の半分以上がコロナ禍で授業や実習など多くの苦労があったと思います。そのような中でも高い志を持ち続け、本日を迎えられる先輩方に深く尊敬の念を

抱いております。このような事態の中でも、先輩方とともに過ごした時間は忘れられない大切な思い出であり、只々感謝しかございません。

卒業後、それぞれの道を歩んで行かれる上で、ときには大きな壁に遭遇することがあるかもしれませんが、本学の仲間とともに切磋琢磨し、医療に携わる者として人間性溢れる先輩方は、どのような困難にも乗り越えられると信じております。

私たち後輩を導きながら、晴れて卒業の日を迎えられる先輩方のように、私たちも残された学生生活を邁進して参ります。

最後になりましたが、皆さまの今後のご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、送別の言葉とさせていただきます。本日はご卒業誠にありがとうございます。

答 辞

看護学部卒業生 長田 実久



冬の寒さも次第に和らぎ、柔らかな春の日差しが心地良く感じられる季節となりました。本日は、私たち卒業生のために素晴らしい卒業式を挙行していただきましたことを卒業生一同、厚く御礼申し上げます。

私たち217名は、この晴れの日を迎えることができたことに喜びを感じるとともに、これまで私たちを温かく見守り、支えてくださった先生方や家族を始め、多くの方々に深く感謝致します。

振り返ってみますと、新たな生活への期待と不安を抱きながら入学した日のことが今懐かしく、4月のオリエンテーションや初めての病棟での実習に緊張したことなどが、つい最近のことのように思い出されます。これまで日々の講義や試験に加えて演習・実習など、これから人の生命に携わる責任を伴う立場になる者として私たちは多くの課題を乗り越えてきました。辛い時も嬉しいときも共に過ごし、夢に向かって励みしあいながら努力しあえる、温かい仲間が存在があったからこそ、今日を迎えることができたと思います。本学で過ごした日々は瞬間に過ぎ、入学してから現在に至るまで、様々な人との出会いや経験がありましたが、それらは私たちにとって、その一つひとつがかけがえ

のない貴重なものです。同じ時間が戻ることはありませんが、ここでの多くの思い出は、一人ひとりの心の中で大きな財産となり、今後の私たちに力を与えてくれるものであるでしょう。

これから、私たちは社会人としてそれぞれ新たな道を歩み始めます。人々を支える立場になることへの緊張感もありますが、これまでの学生生活で培った多くの学びや人々との繋がりを糧にして、あらゆる困難にも立ち向かい、乗り越えていきたいと思います。そして医療従事者として、また一人の人間として成長し続けることができるように日々精進して参ります。

最後になりましたが、学長先生、ご来賓の皆さま、在学生の方々に御礼申し上げますとともに、お世話になりました諸先生方、地域の皆さま、多くの患者さん、医学部後援会、看護学部父母会、同窓会、大学職員、病院職員の皆さま、そして、これまで惜しみない支援をし、見守ってくれた家族に、卒業生一同、深く感謝し、皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

そして、愛知医科大学の更なるご発展を祈念致しますとともに、本学の卒業生であるという誇りを胸に、その名に恥じぬよう、社会への貢献に努めていくことを誓い、答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

石のテーブルと椅子寄贈

令和5年度医学部卒業生からの卒業記念品として、レストランオレンジ前の芝生に「石のテーブルと椅子」が贈呈され、令和6年3月2日（土）の卒業証書・学位記授与式終了後に除幕式が行われました。【写真】

当日は、祖父江元 学長、笠井謙次医学部長を始めとした学内役職者に加え、令和5年度卒業生からは代表者の本村理子さんを始め多数の卒業生が出席しました。

本村さんからは「6年間の学生生活は長いようであつという間に過ぎ去っていきました。日々の勉強や部活など忙しく過ごす毎日でしたが、その中でも友人と過ごした時間はかけがえのない思い出となりました。そんな大切な時間を過ごすための場所を残したいという願いを込めて、石のテーブルと椅子を贈ります。テーブルと椅子は今年度リニューアルされたレストランオレンジの前に設置します。皆が大好きなオレンジのパンやお弁当を食べながら、太陽



の下、大切な友人と素敵な時間を過ごしてもらえたら幸いです。」と贈呈の言葉がありました。

続いて祖父江学長から「今日は、コロナ禍の卒業式とは違い、大変多くの保護者の方々、在学生にも集まっていただきました。この素晴らしい椅子とテーブルは、様々な使い方ができるのではないかと思います。本当にありがとうございました。」とお礼の言葉が述べられました。

非常用ポータブル電源充電用ソーラーパネル二点寄贈

令和5年度看護学部卒業生からの卒業記念品として、「非常用ポータブル電源充電用ソーラーパネル二点」が寄贈され、令和6年3月13日（水）に7号館（医心館）3階フロアーにて除幕式が行われました。【写真】

除幕式には、祖父江元 学長、坂本真理子看護学部長、泉雅之看護学部長補佐、若杉里実教務学生部長、心光世津子教務学生部次長、谷口千枝教務学生部次長、羽根田雅巳事務局長など本学役職者や看護学部教員及び令和5年度卒業生が参加しました。

始めに、卒業生を代表して水谷日向子さんから、「私たちは愛知医科大学の発展と後輩たちが豊かな感性と思考力を持った看護を学び、看護専門職者として対象となる人々とともに健康を追求していけるよう、また、私たち第21期生が太陽の恵みの元で深い知識と確実な技術を蓄えていける看護師でありたいという思いを込めて卒業記念品として『非常用ポータブル電源充電用ソーラーパネル二点』を贈呈致します。」との贈呈の言葉をいただきました。続



いて、祖父江学長から、「コロナ禍での経験が災害時に備える高い意識へと繋がっているものと思われます。昨年度贈呈品（非常用照明機器セット『最後の砦』及びポータブル電源一式）から繋がる非常時に有用な品を贈呈いただき、ありがとうございました。」、坂本看護学部長から、「『災害看護学』は、本学看護学部の柱とする分野です。予期せぬ事態となった際に、このような災害時用備品を誰もが使いこなせるようなトレーニングを行っていききたいと思います。」とお礼の言葉が述べられました。

大学院学位記授与式

令和6年3月2日（土）午前9時20分から大学本館711特別講義室において、令和5年度大学院学位記授与式が挙行されました。【写真】

式では、医学研究科博士課程修了者10名を代表して加藤三香子さん、看護学研究科修士課程修了者15名を代表して飯田仁斗さんの2名に対し、祖父江元学長から学位記が授与されました。

続いて、祖父江学長から告示が述べられ、式は終了しました。



名誉教授称号授与式挙行

令和6年3月31日付けをもって退職された山森孝彦教授（外国語）、若槻明彦教授（産婦人科学講座）、宮地茂教授（脳神経外科学講座）、福澤嘉孝教授（先制・統合医療包括センター）、渡辺秀人教授（分子医科学研究所第一部門）に愛知医科大学名誉教授の称号が授与され、令和6年4月8日（月）正午から大学本館役員会議室1において授与式が行われました。

授与式には、祖父江元 理事長・学長を始め、笠井謙次副学長（医学教育担当）、鳥田孝一法人本部長が出席し、祖父江理事長から称号記が授与され、記念撮影が行われました。



出席者による記念撮影

記念撮影の後、昼食を交えた懇親会が開かれ、和やかな雰囲気の中、午後1時頃に授与式は終了しました。

役員・評議員の異動

【理 事】

- | | |
|-----|------------------------------|
| 退 任 | 坂本真理子（令和6年3月31日付） |
| 就 任 | 若杉 里実（任期：令和6年4月1日～令和7年1月27日） |
| 再 任 | 祖父江 元（任期：令和6年4月1日～令和8年3月31日） |

【評議員】

- | | |
|-----|------------------------------|
| 退 任 | 坂本真理子（令和6年3月31日付） |
| 就 任 | 若杉 里実（任期：令和6年4月1日～令和7年1月27日） |
| 就 任 | 八島 妙子（任期：令和6年4月1日～令和7年1月27日） |

令和6年度予算大綱

令和6年度予算が、令和6年3月18日（月）の理事会、評議員会において承認されましたので、お知らせします。

昨年度までは、新型コロナウイルス感染症による病棟閉鎖や職員の罹患などの影響で、診療体制に支障が出る状況が続きましたが、一方で、この期間に診療機器の整備やスタッフの拡充を推し進め、将来の大きな成長に繋がる事業をスタートさせながらアフターコロナに向けた準備を進めてきました。令和6年度はコロナ期間中に蒔いた成長の種が、開花・結実する年と位置付け、収入は600億円を突破する予算を計上するに至りました。

令和6年度は、新たな5年間の中期計画がスタートする年になります。「財の独立なくして学の独立なし」と言われるように、財政的な基盤のないところに教育や研究あるいは診療の進化発展は望めないことから、財政基盤の確立は全ての要素の基礎となります。事業全体の8割を医療収入が占める本学においては、まずは医療収入基盤の確保ですが、外部資金の獲得、寄付金の獲得に向けた事業が始まっていくことなど、今後を占うスタートの年となります。

令和6年度は、これまでの取り組みや成果を基盤として、愛知医科大学が更なる成長を遂げるための活力を湧き立たせることで、中期計画に基づく持続的イノベーションと五つのStrategyをキーワードに、持続可能な発展を目指します。

教育分野については、医学教育について、5学年次から予備校の模擬試験を受験させることで、早い段階から、医師国家試験合格に向けた意識付けを行います。

ICTを用いた講義が増え、講義時に使用するタブレット端末やノートパソコンの使用時間が増えたことで、充電する場所、コンセントの数が不足し問題となっていたことから、学生が常時使用する四つの講義室の机にコンセントを増設します。

次世代型Whole Bodyモニタリング超高度リハシステムを導入し、診療参加型臨床実習の環境及び生理学も含めた臨床研究の場としての充実を図るとともに、重複疾患患者にも安全で高度なりハビリを提供することができ、AIを駆使した個別医療の推進に資するようにします。

看護学部においては、学生支援の一環として、入学時にパソコンを準備できない学生への貸し出し用パソコンを追加で用意します。また、令和7年度の大学院看護学研究科博士課程開設に向けて、書類審

査を経て認可を受けるとともに、設置に向けた体制（募集活動、入学試験、研究室準備等）整備を行います。

研究分野については、シングルセル遺伝子解析を行うための機器が設置後10年を経過しており、不具合が生じているため、最新の医学研究推進を図るため補助金を利用して機器の更新を予定します。

平成30年に選定されて開始した私立大学ブランディング事業である「健康維持・増進を支える次世代先制地域医療：炎症コホート研究」について、引き続き実施します。

医療分野については、リハビリテーションニーズの増大と多様化に伴い、各診療科からの依頼件数が増加したことによる患者一人当たりの一日の実施単位の減少に対し、スタッフを3名増員することで実施（請求）単位数の回復及び増加を図ります。そして、更なるリハビリテーション医療の拡充を目指し、多様化や潜在的なニーズに対応するため、スタッフの増員と併せて療法室の大幅な拡張を図ります。

特定機能病院において病棟専従の管理栄養士を配置することで、入院栄養管理体制加算の算定が可能となったため、病棟拡大に対応し3名の管理栄養士を採用します。

また、令和5年度に増設したMRIを使用し、ダウンタイムが発生しないようにしながら、1台を更新するほか、更新時期を迎えた周術期生体情報モニタや、GCU／新生児情報モニタなどの診療機器を更新します。

<主な事業>

教育・研究に関するもの

■ 教育環境の整備

○ 機材及びシステムの新規導入または追加整備

- ・ 大学本館1号館2階及び3階講義室（202,301,302, 303）の机に電力供給用のコンセントを取り付ける。
- ・ シミュレーションセンター開設時に購入した高機能シミュレーターの定期メンテナンスを行い、充実した教育設備環境を維持する。
- ・ 有効的な実技演習実施のため、小児シミュレーターの購入等を行う。
- ・ 学生支援の一環として、学生へ貸し出すことを目的としたパソコンを7台購入する。
- ・ 令和5年度から令和10年度までの6年間で次世代のがん対策の基盤を担う専門医療人を養成する教育プログラムを大学間連携によって開発・

実施する。

- ・次世代型Whole Bodyモニタリング超高度リハシステムを導入することで、診療参加型臨床実習の環境及び生理学も含めた臨床研究の実践の場として充実を図る。

○教育研究活性化引当特定資産の活用

- ・医学部若手研究者に対する教育研究奨励助成を実施する。
- ・看護学部若手研究者に対する研究助成を実施する。

○国際交流推進引当特定資産の活用

- ・外国人研究者に対する滞在費助成を実施する。

■ 研究環境の整備

○遺伝子解析を行うための機器購入

- ・シングルセル遺伝子解析を行うためのセルソーターとリアルタイムPCRを更新する。

○研究業務のDX化

- ・研究支援業務のDX化を図り、研究管理体制を強化する。

○私立大学研究ブランディング事業

- ・私立大学研究ブランディング事業「健康維持・増進を支える次世代先制地域医療：炎症評価コホート研究」を継続実施する。

■ 教育充実活性化対策

○医学部における教育充実に向けた取り組み

- ・教育の充実化に貢献した講座等に対してインセンティブを支給する。

■ その他

○継続的な教育改革の実施

- ・教員に対して多彩な研修を実施し、全教員に対してスキルアップの機会を多く提供し、継続的な教育改革を実施する。
- ・改革的かつ効果的な看護学部運営のため、将来のリーダー候補者等に対して企業マネジメント等を学び、組織のマネジメントやリーダーシップを学修する。

○看護学部入学試験に係るシステム改修

- ・看護学部において令和7年度入学者選抜より「共通テスト併用型選抜」を導入することに伴い、「願書受付システム」の改修等を行う。

○クラブハウスリニューアル

- ・クラブハウスにおいて、劣化により利用しづらい設備を更新する。

○トレーニングルーム床埋込体重計撤去、床補修工事

- ・運動療育センターのトレーニングルームフロアにおいて、床の補修工事を行うことでスペースを有効に活用できるようにする。

■ 本院の医療に関するもの

■ 教員・スタッフの増員

○理学療法士の増員

- ・リハビリテーションニーズ増大と多様化に対応するため、理学療法士を3名増員する。

○臨床工学技士の増員

- ・医療の質、安全性の向上をより高めるために臨床工学技士1名を増員する。

○診療看護師（NP）の増員

- ・医師のタスクシフト等を鑑み、診療看護師（NP）を7名増員する。

○社会福祉士・精神福祉士の増員

- ・愛知県からの委託事業等に係る業務に対応するため社会福祉士・精神保健福祉士を3名増員する。

○歯科技工士の増員

- ・体表面補綴外来に歯科技工士を1名増員し、更なる患者の獲得を目指す。

○管理栄養士の増員

- ・栄養管理の向上、入院栄養管理加算の算定など可能とするため管理栄養士を3名増員する。

○薬剤師の増員

- ・経過観察入院病棟に配置するための薬剤師を1名増員する。

■ 労働環境の改善

○ディスポタイプ吸引器の導入

- ・一般病棟においてディスポタイプの吸引器を導入し、看護師の負担軽減、患者環境の改善に繋げる。

■ 診療活性化対策

○新リハビリテーション施設の増設

- ・リハビリテーションニーズ増大に対応するため、施設の増設を図る。

○麻酔科医の確保

- ・手術件数の確保、GICUにおける安定的な医療体制の維持、麻酔科当直体制の維持を目的とした麻酔科医の確保を図る。

○病院長インセンティブの支給

- ・病院長が入院外来診療報酬請求額の前年度対比を評価指標とし、各種項目を裁量評価することで、成果を挙げた診療科等に病院長インセンティブを支給し、診療の一層の活性化を図る。

■ 診療用機器の整備

○MRI装置の更新

- ・MRI増設事業の一環として、現在使用中のMRI装置1台を更新する。

○効率的な手術室運営のための機器整備

- ・効率的な手術室の運営を図るため、ハイスピード滅菌機、Cアームなど整備する。

○各種機器装置の更新

- ・透析液供給装置 RO装置
- ・腹部エコー
- ・GCU / 新生児 生体情報モニタ更新
- ・多項目自動血球分析装置の機器更新
- ・周術期 生体情報モニタリングシステム更新

■ その他

○検査関連部門における国際規格の認定維持

- ・国際規格の変更に伴い、ISO認定維持のための内部監査員養成セミナーを実施する。

○病院機能評価受審事業

- ・令和7年度に控える病院機能評価受審事業に向けて円滑な受審体制を構築する。

○コンテナユニット（CoMU・コミュ）活用事業

- ・コンテナ医療ユニット（CoMU）を、大規模イベント時に派遣するなどして活用する。

○感染検査室非常用電源由来の空調設備の増設

- ・感染検査室における非常用電源由来の空調設備を増設する。

メディカルセンターの医療に関するもの

■ 教員・スタッフの増員

○理学療法士の増員

- ・リハビリテーション医療の充実に向けて、理学療法士3名、作業療法士2名、言語聴覚士2名を増員する。

■ 病院システム更新関連

○メディカルセンターエアコン（GHP）保守

- ・北館に設置のエアコン（GHP）の保守委託をする。

○メディカルセンター電話交換機更新工事

- ・故障リスクを回避し、通信の信頼性を維持するために電話交換機を更新する。

眼科クリニックMiRAIの医療に関するもの

■ 教員・スタッフの増員

○看護師、視能訓練士、クラーク（医師事務）の増員

- ・日帰り手術件数、外来患者数の増加に対応するため看護師2名、視能訓練士1名を増員する。また、クラーク（医師事務）の増員・待遇改善をする。

○広報事業

- ・大学レベルの高度な治療を行う眼科クリニックとして紹介元医療機関の開拓および眼科をお探しの個人への訴求のための各種広告展開を図る。

法人・大学運営に関するもの

■ 創立50周年記念事業

○愛知医科大学50年誌の作成

- ・創立50周年記念事業の一環として「愛知医科大学創立50周年記念誌」を作成する。

■ 建物修繕

○構内電源ケーブル等更新工事

- ・構内に張り巡らされている高圧電力ケーブルのうち、経年劣化により更新が必要な3回線を更新する。

○電力監視システム等更新工事

- ・構内全ての電力状態を常時監視し、各棟の系統ごとに電気使用料等の各帳票を蓄積、管理している設備の更新を行う。

○中央監視設備更新工事

- ・中央棟の全ての冷暖房設備、換気設備、給排水に至るライフラインの供給を監視する設備の更新をし、中央監視の安定稼働を図る。

○3号館（基礎科学棟）空調設備更新工事

- ・3号館（基礎科学棟）の空調設備更新工事を行う。

■ その他

○経営改革・イノベーション推進事業

- ・理事長直轄の組織である経営戦略推進本部において、①地域医療連携推進、②救急医療体制改革、③働き方改革、④財政基盤改革、⑤中長期計画、⑥本学事業部門の再編、⑦リハビリテーション学部構想、⑧その他に取り組む。

○財務会計システムの更新

- ・電子帳簿保存法へ対応するために財務会計システムの更新を行う。

○駐車場管理システム、機器の更新

- ・駐車場管理システム、機器の更新を行う。

資 金 収 支 予 算

令和6年4月1日から

令和7年3月31日まで

(単位：千円)

収 入 の 部			
科 目	本年度予算	前年度（12月補正後）予算	増 減
学生生徒等納付金収入	4,876,260	4,914,840	△ 38,580
手数料収入	202,603	215,510	△ 12,907
寄付金収入	396,410	640,150	△ 243,740
補助金収入	1,853,684	2,632,915	△ 779,231
資産売却収入	0	36,334	△ 36,334
付随事業・収益事業収入	896,429	1,017,235	△ 120,806
医療収入	52,247,072	48,933,071	3,314,001
受取利息・配当金収入	1,490	1,490	0
雑収入	825,516	607,258	218,258
借入金等収入	150,000	150,000	0
前受金収入	939,172	974,651	△ 35,479
その他の収入	8,873,330	12,216,976	△ 3,343,646
資金収入調整勘定	△ 9,198,647	△ 8,611,730	△ 586,917
前年度繰越支払資金	7,656,867	8,606,530	
収 入 の 部 合 計	69,720,186	72,335,230	△ 2,615,044

支 出 の 部			
科 目	本年度予算	前年度（12月補正後）予算	増 減
人件費支出	22,683,820	22,409,401	274,419
教育研究経費支出	31,371,121	29,196,122	2,174,999
管理経費支出	1,146,916	1,172,118	△ 25,202
借入金等利息支出	207,311	222,725	△ 15,414
借入金等返済支出	974,346	1,221,846	△ 247,500
施設関係支出	1,187,377	3,338,787	△ 2,151,410
設備関係支出	1,893,966	2,476,667	△ 582,701
資産運用支出	150,000	150,000	0
その他の支出	7,442,126	8,084,532	△ 642,406
〔 予 備 費 〕	500,000	1,050,000	△ 550,000
資金支出調整勘定	△ 6,769,622	△ 5,772,525	△ 997,097
期末未払金	△ 6,535,994	△ 5,598,718	△ 937,276
前期末前払金	△ 233,628	△ 173,807	△ 59,821
翌年度繰越支払資金	8,932,825	8,785,557	147,268
支 出 の 部 合 計	69,720,186	72,335,230	△ 2,615,044

事業活動収支予算

令和6年4月1日から

令和7年3月31日まで

(単位：千円)

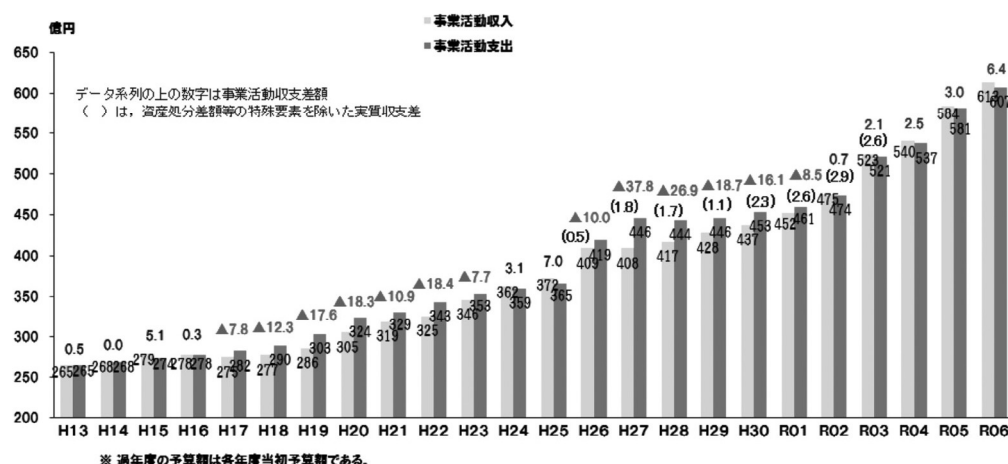
教育活動収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度（12月補正後）予算	増 減
		学生生徒等納付金	4,876,260	4,914,840	△ 38,580
		手数料	202,603	215,510	△ 12,907
		寄付金	398,410	642,150	△ 243,740
		経常費等補助金	1,826,438	2,606,757	△ 780,319
		付随事業収入	896,429	1,017,235	△ 120,806
		医療収入	52,247,072	48,933,071	3,314,001
		雑収入	825,516	607,258	218,258
		教育活動収入計	61,272,728	58,936,821	2,335,907
	事業活動支出の部	人件費	22,837,096	22,708,130	128,966
教育研究経費		35,810,862	33,390,407	2,420,455	
管理経費		1,512,416	1,479,034	33,382	
徴収不能額等		3,341	14,771	△ 11,430	
教育活動支出計		60,163,715	57,592,342	2,571,373	
教育活動収支差額		1,109,013	1,344,479	△ 235,466	
教育活動外収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度（12月補正後）予算	増 減
		受取利息・配当金	1,490	1,490	0
		その他の教育活動外収入	0	0	0
		教育活動外収入計	1,490	1,490	0
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度（12月補正後）予算	増 減
		借入金等利息	207,311	222,725	△ 15,414
		その他の教育活動外支出	0	0	0
		教育活動外支出計	207,311	222,725	△ 15,414
	教育活動外収支差額		△ 205,821	△ 221,235	15,414
	経常収支差額		903,192	1,123,244	△ 220,052
特別収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度（12月補正後）予算	増 減
		資産売却差額	0	0	0
		その他の特別収入	55,246	54,158	1,088
		特別収入計	55,246	54,158	1,088
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度（12月補正後）予算	増 減
		資産処分差額	20,000	39,249	△ 19,249
		その他の特別支出	0	0	0
		特別支出計	20,000	39,249	△ 19,249
	特別収支差額		35,246	14,909	20,337
	〔予備費〕		300,000	750,000	△ 450,000
基本金組入前当年度収支差額		638,438	388,153	250,285	
基本金組入額合計		△ 4,100,000	△ 6,100,000	2,000,000	
当年度収支差額		△ 3,461,562	△ 5,711,847	2,250,285	
前年度繰越収支差額		△ 75,925,721	△ 66,775,958	△ 9,149,763	
翌年度繰越収支差額		△ 79,387,283	△ 72,487,805	△ 6,899,478	
(参考)					
事業活動収入計		61,329,464	58,992,469	2,336,995	
事業活動支出計		60,691,026	58,604,316	2,086,710	

令和6年度予算状況は、

事業活動収入 613億2,946万余円

事業活動支出 606億9,102万余円

となっており、事業活動収支差額は6億3,843万余円の黒字となっています。



事業活動収支予算では、収入61,329百万円（前年度比3.96%増）、支出60,691百万円（前年度比3.56%増）となり、収支差は638百万円の黒字予算となっています。

資金収支予算では、学生生徒等納付金収入4,876百万円、寄付金収入396百万円、補助金収入1,854百万円、医療収入52,247百万円など資金収入合計62,063百万円となっています。

一方、人件費支出22,684百万円、教育研究費支出31,371百万円、管理経費支出1,147百万円、施設関係支出1,187百万円、設備関係支出1,894百万円、借入金等返済支出974百万円など資金支出合計60,787百万円となっています。

医師の働き方改革に伴う第2回全体説明会開催

令和6年3月4日（月）午後4時30分から、大学本館たちばなホールにおいて、診療科所属医師、臨床技術員を対象に医師の働き方改革に伴う第2回全体説明会が開催され、多数の職員が参加しました。

本学独自の医師の働き方改革実現のため、祖父江元理事長のもと、働き方改革プロジェクトとして様々な議論を重ね、進捗状況等を随時常任理事会に報告し、対象となる職員にも病院の定例会で理事長から説明しています。直近では、令和5年12月19日（火）の部長会、12月25日（月）の医局長会、令和6年1月10日（水）の第1回全体説明会に続く全体説明会の開催となりました。

当日は、働き方改革担当の伊藤恭彦プロジェクトリーダーの司会のもと、祖父江理事長から、令和6年4月1日の医療法改正に伴い、いよいよ始まる全国的な医師の働き方改革に向け、本学においても新たに導入される変形労働時間制の活用、本院独自の業務と研鑽の定義、宿日直許可の再取得に伴う運用方法等の説明がありました。

また、規程・規則について、働き方改革の実施に伴う臨床系教員の勤務時間等の特例に関する規程などの新規制定、就業規則・給与規程の改定を始めとした、様々な制度の変更について説明があり、制度改革とともに医師の意識改革も重要である旨が発信されました。

勤務の都合上、今回の説明会に参加できなかった方々のため、同説明会及び過去の説明会の動画配信も行っております。

4月1日から導入される新勤務管理システムDr.JOYでは、客観的な勤務時間情報が得られると同時に出勤・退勤時の職員証による打刻が不要となり、医師の負担も軽減されます。医師には、次月の勤務予定の事前入力、当月の時間外勤務実績、当直実績など入力していただくことになります。

医療法改正に伴う適正な勤務管理を実行し、勤務医師の健康確保に努めて参ります。医師のご理解及びご協力は必要不可欠となります。よろしくお願い致します。

主な役職者の改選

○ 大 学

【副学長（医学教育担当）】



笠井 謙次

（病理学講座・教授）

引き続き、副学長を拝命致しました。全ての教職員と協力して教務、学生生活、研究及び体制整備などに取り組み、学生諸君と一緒に更なる医学教育の向上を図ります。

更に、令和8年度受審予定の医学教育分野別評価2巡目に向けた準備も合わせて進めて参ります。

（再任、任期：R 6 . 4 . 1 ～ R 8 . 3 .31）

【副学長（看護学教育担当）】



若杉 里実

（公衆衛生看護学・教授）

この度、副学長を拝命致しました。看護学研究科博士課程設置の準備を進めます。また、看護学部と本院看護部が有機的に連動し、学生から卒業後の看護師へと繋げていくキャリア教育の仕組みづくりに取り組んで参ります。宜しくお願い致します。

（新任、任期：R 6 . 4 . 1 ～ R 8 . 3 .31）

【副学長（特命担当）】



春日井 邦夫

（内科学講座(消化管内科)・教授）

引き続き、副学長を拝命致しました。ダイバーシティ推進委員会を更に活性化させ、全ての職員が能力と個性を十分発揮できる環境作りをして参ります。また、教員評価の見直しやホームページの継続的な改善にも取り組んで参ります。宜しくお願い致します。

（再任、任期：R 6 . 4 . 1 ～ R 7 . 3 .31）

【副学長（特命担当）】



佐藤 元彦

（生理学講座・教授）

引き続き、公的研究費管理・研究不正防止等担当副学長（特命担当）を拝命しました。今年度は、省庁の方針に従って安全保障輸出管理体制の再整備を進める予定です。皆さまのご意見・ご協力のもと進めて参りたいと思いますので、宜しくお願い致します。

（再任、任期：R 6 . 4 . 1 ～ R 7 . 3 .31）

【教務部長】



鈴木 耕次郎

（放射線医学講座・教授）

引き続き、教務部長を拝命しました。近年は国試合格率を高水準で維持しており、今後もカリキュラム改善と学生支援を充足させ、留年生の減少と国試合格率の高水準維持に務めます。また、授業と実習をより充実させ、患者に寄り添える医師を育成する方針です。

（再任、任期：R 6 . 4 . 1 ～ R 8 . 3 .31）

【総合学術情報センター長】



細川 好孝

（生化学講座・教授）

引き続き、総合学術センター長を拝命致しました。本センターは、図書館部門、ICT支援部門、情報基盤部門からなります。今後も図書館部門のサービス充実、ICT支援システム及び情報基盤の充実を図ることで、学生教育への貢献並びに教職員の業務向上に取り組んで参ります。

（再任、任期：R 6 . 4 . 1 ～ R 8 . 3 .31）

【災害医療研究センター長】



津田 雅庸

(災害医療研究センター・教授)

引き続き、災害医療研究センター長を拝命致しました。本センターは災害医療の教育・研究を行っております。本院は基幹災害拠点病院に指定されており、病院・大学の更なる発展に取り組むとともに実災害においても貢献して参ります。

(再任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 8 . 3 . 31)

【国際交流センター長】



都築 豊徳

(病理診断学講座・教授)

今回、国際交流センター長を拝命致しました都築と申します。本学の国際交流事業を統括する役割であり、学生・教職員の国際交流、学生・教職員の英語学力向上、異文化コミュニケーションの理解を促すセミナー開催、本学で学ぶ外国人研究者の支援等を行っております。御支援の程、宜しくお願い申し上げます。

(新任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 7 . 3 . 31)

【保健管理センター長】



鈴木 孝太

(衛生学講座・教授)

引き続き、保健管理センター長を拝命致しました。学生、そして教職員の皆さんが、毎日を健康に過ごすことができるようサポートして参ります。体調不良時の休養や健康相談など、いつでも気軽にD棟 6 階のセンターをご利用ください。

(再任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 8 . 3 . 31)

【加齢医科学研究所長】



岩崎 靖

(加齢医科学研究所・神経病理研究部門・教授)

引き続き、加齢医科学研究所長を拝命致しました。世界有数のブレインリソースセンターを持ち、神経疾患の病態に関する神経病理学的研究とiPS細胞由来神経系細胞を用いた研究を行う本研究所は、これからも神経科学の発展、教育に貢献していきたいと思います。

(再任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 8 . 3 . 31)

【分子医科学研究所長】



細川 好孝

(生化学講座・教授)

この度、分子医科学研究所長を拝命致しました。本研究所は、糖鎖研究で世界的な成果を挙げてきました。今後、ビッグデータを駆使した医学研究が重要になってきます。このような新たな方向性を念頭に置いて、本学の更なる医科学研究の発展に取り組んで参ります。

(新任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 7 . 3 . 31)

○ 医学部

【眼科クリニックMiRAIクリニック長】



三木 篤也

(近視進行抑制寄附講座・教授(特任))

引き続き、眼科クリニックMiRAIクリニック長を拝命しました。白内障を始め、緑内障・網膜、眼形成等の専門性の高い日帰り手術と、近視の研究を更に発展して参ります。引き続き、ご支援宜しくお願い致します。

(再任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 8 . 3 . 31)

【総合医学研究機構長】



佐藤 元彦

(生理学講座・教授)

前年度に引き続き、総合医学研究機構長を拝命致しました。高度研究機器部門、動物実験部門、核医学実験部門からなる総合医学研究機構は研究活動の中核として機能しています。設備の有効活用を通して、本学研究活動の発展に貢献して参りたいと思います。

(再任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 8 . 3 . 31)

【 I R 室 長 】



笠井 謙次

(病理学講座・教授)

引き続き、IR室長を拝命致しました。入試から学生教育、国試対策はもちろん、研究活動、組織運営など、大学活動の全ての局面で客観的データに基づく指針策定が必要です。IR室ではデータ収集と分析を通じて、本学の更なる成長戦略に貢献したいと考えています。

(再任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 8 . 3 . 31)

○ 看護学部

【看護実践研究センター長】



心光 世津子

(精神看護学・教授)

この度、看護実践研究センター長を拝命致しました。設置から16年間で展開してきた事業並びに培ってきた大学・大学院、医療機関、地域との連携を基盤とし、より効果的な活動を探究・発展していくことで、臨床・地域のニーズに貢献できるよう努めて参ります。

(新任, 任期: R 6 . 4 . 1 ~ R 8 . 3 . 31)

大学運営審議会～新メンバーでスタート～

学長及び副学長を中心に大学の重要事項及び将来構想等を審議する組織として、平成28年4月1日付けにて設置された「大学運営審議会」は、毎年度15回程度開催され、各種規則の改廃に係る審議のほか、副学長から学部・病院の動向や課題等について随時報告がなされ、両学部間での情報共有が図られています。

昨年度に任期満了に伴う学部長の改選があり、令和6年度は新メンバーで第1回大学運営審議会が4月15日（月）に開催されました。

今年度は、大学評価後の改善課題への対応、アドミッションセンターの設置、大学院看護学研究科博士後期課程の設置、教授人事など、様々な課題への迅速な対応を重視し、構成員が多忙の中ではありますが、開催時間を調整しながら積極的に開催していきます。



<構成員>

学 長	祖父江 元
内部質保証責任者	祖父江 元
副学長（医学教育担当）	笠井 謙次
副学長（看護学教育担当）	若杉 里実
副学長（診療担当）	道勇 学
副学長（特命担当）	春日井邦夫
副学長（特命担当）	佐藤 元彦
事務局長	羽根田雅巳

名古屋市教育委員会共催「市民大学公開講演会」開催

令和6年2月10日（土）午後1時30分から、イーブルなごやホールにおいて、名古屋市教育委員会との共催で市民大学公開講演会が開催されました。

「愛知医科大学における最先端研究・医療」をテーマに二部構成で行われ、第一部の講演では、泌尿器科学講座の佐々直人教授が、「前立腺癌をどう治療する？－PSA検診の新しい考え方」と題し、癌に罹患する原因には家族歴（食生活や環境）が影響することや癌罹患時の治療の選択肢など、最新の前立腺癌治療について講演されました。

続いて、第二部の講演では、加齢医科学研究所神経iPS細胞研究部門の岡田洋平教授が、「神経難病克服への挑戦－iPS細胞を用いた疾患・創薬研究への最前線」と題し、高品質なiPS細胞の作成方法開発や、



佐々教授



岡田教授

その細胞の再生医療への応用などについて講演されました。

参加者からは「とても難しい内容だが分かりやすい講演で良かった。」「新たな知識を習得できて役立った。」などの感想があり、大変盛況な講座となりました。

中部先端医療開発円環コンソーシアム加盟大学として メディカルメッセ2024参画

令和6年4月18日（木）から20日（土）の3日間にわたりAichi Sky Expo（愛知県国際展示場）において、名古屋商工会議所の主催により、医療とモノづくり技術の展示商談会として「メディカルメッセ2024（医療に活かそう中部のモノづくり）」が開催されました。

本学は、中部先端医療開発円環コンソーシアム加盟大学としてこのイベントに参画し、内科学講座（肝胆臓内科）の奥村彰規特別研究助教及び内科学講座（循環器内科）の山田純生特命教授が研究成果のポスター発表を行いました。【写真】

医療機器産業に携わる企業などが一同に会する展示商談会において、アカデミアから研究成果を発表



することは、企業ニーズとのマッチングが行われる良い機会となりました。

令和5年度愛知県災害医療コーディネート研修開催

令和5年8月27日（日）に日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院（日赤愛知災害管理センター棟）において、愛知医科大学、愛知県及び愛知県医師会の三者共催による令和5年度愛知県災害医療コーディネート研修第1回研修会が開催されました。

本事業は、愛知県の災害時における医療調整機能の強化を図ることを目的として、地域における災害時医療チームの派遣調整、患者の受け入れや搬送の調整を担当する医師等を対象に、必要な知識の習得と県共通の認識を共有するために本学災害医療研究センターが中心となり、平成27年度から実施されています。

当日は、県内の医師会、保健所、災害拠点病院、看護協会から、医師のみならず、コメディカルや事務職員など、幅広い職種の58名が参加されました。

残念ながら、令和6年3月3日（日）に開催を予



机上演習の様子

定していた第2回研修会は、令和6年1月1日に発生した能登半島地震での被災地支援活動のため、やむなく中止となりました。

災害医療研究センターでは、南海トラフ地震や各種災害における犠牲者を軽減するため、災害医療の教育・研究をより積極的に進めて参ります。

令和5年度介護施設等防災リーダー養成研修開催

令和3年度以降、本学の災害医療研究センターが、愛知県委託事業「介護施設等防災リーダー養成研修事業」に採択されており、令和5年度においても介護施設等の職員を対象とした「防災リーダー養成研修」が6回にわたり開催されました。

第5回及び第6回研修は、会場での現地開催を予定しておりましたが、令和6年1月に発生した能登半島地震に対し、被災地支援活動に本学教員も従事するとともに、愛知県内の介護施設等に対して被災者の受け入れが依頼されている状況を鑑みて延期されることとなり、後日Zoomによる合同Web研修が開催されました。

本事業は、近年頻発している大規模地震などの激甚災害に対して、要配慮者を預かる介護施設等がどのように対策を講じて備えていくかを考え、「防災リーダー」を養成することを目的としています。実際に被災経験のある介護施設の事例紹介や、愛知県の被害予測を踏まえた講義及び机上演習を実施し、



研修会グループ演習の様子

各施設における危機意識の向上及び実効性があるBCP（事業継続計画）の見直しに繋がる研修となりました。

研修後のアンケートでは、「発災時に事業所内でのどのように過ごすべきか考えさせられ、改めてBCPの策定を見直していきたい。」「自施設で開催する防災会議や防災訓練に役立てたい。」など研修プログラムに対して多くの方から好評を得ており、大変有意義な研修となりました。

研 修	日 程	対 象	会 場
第1回・第2回	令和5年10月3日（火） 4日（水）	三河地区	蒲郡商工会議所
第3回・第4回	令和5年12月5日（火） 6日（水）	東尾張ほか 県内全域	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 （日赤愛知災害管理センター棟）
第5回・第6回 ※合同Web研修	令和6年2月28日（水）	西尾張地区	愛知医科大学（運営本部）

厚生労働省令和5年度老人保健健康増進等事業 「海拔ゼロメートル地帯における地域BCP に関するシンポジウム」開催

本学の災害医療研究センターが応募した、「海拔ゼロメートル地帯における洪水・高潮・津波災害時を想定した南海トラフ地震時の高齢者介護施設を中心とした広域避難及びBCPに関する調査研究」が、厚生労働省の令和5年度老人保健健康増進等事業に採択されました。

令和6年2月15日（木）には、同事業の調査研究のまとめとして、名古屋市中小企業振興会館（吹上ホール）7階メインホールにおいて、「海拔ゼロメートル地帯における地域BCPシンポジウム」が会場参加及びオンライン参加の併用形式で開催されました。

本シンポジウムでは、海拔ゼロメートル地帯における災害対応の課題を解決することを目的とし、海拔ゼロメートル地帯に所在する、高齢者介護施設の防災担当者及び医療・行政関係者の方々、120名が参加しました。

令和6年1月1日（月）に発生した能登半島地震では、能登地域の高齢者介護施設の多くが長期孤立し、施設備蓄が枯渇するとともに施設利用者の多くが衰弱し、被災地外へ避難させる事例も発生しました。本事業の検討委員でもある災害医療研究センターの教職員は、DMATとして現地での被災地支援活動にも尽力してきたことから、シン



シンポジウムでの討論の様子

ポジウムでは海拔ゼロメートル地帯でも起こり得る災害形態であった、能登半島地震での高齢者介護施設における対応を紹介するとともに、令和5年度厚生労働省老人保健健康増進等事業において検討した結果を報告し、高齢者介護施設、市町村、都道府県の被災時行動のあり方・備えについて討論が行われました。

今回のシンポジウムでは、海拔ゼロメートル地帯における地域BCPのあり方を提示することができました。

今後も、災害医療研究センターでは、より実効性のある地域BCPとなるよう関係機関の体制整備構築に努めていきます。

「私立大学研究ブランディング事業」公開講座開催

令和6年1月20日（土）及び2月11日（日）に大学本館たちばなホールにおいて、「私立大学研究ブランディング事業」公開講座が開催されました。

本講座は、平成30年度に採択された文部科学省私立大学研究ブランディング事業の一環として、同事業による研究成果等の市民への還元を目的として実施されました。

開催に当たり、私立大学研究ブランディング事業実務者会議の渡辺秀人委員長から、同事業の背景や意義について説明があり、続いて、「健康長寿社会の実現に向けて」をテーマとした公開講座が行われました。

1月20日（土）は、分子医科学研究所の渡辺秀人教授から「血管の健康、糖鎖が教えてくれる？」、内科学講座（呼吸器・アレルギー内科）の伊藤理教授から「肺とリウマチとの深い関係について」、中央臨床検査部の中山享之教授（特任）から「血が固まらず困る話、血が固まって困る話」と題した3部構成で講演が行われました。また、2月11日（日）は、内科学講座（肝胆膵内科）の伊藤清顕教授から「糖鎖マーカーを使用して長久手市民を健康長寿へ」、運動療育センターの西須大徳助教から「あなたは痛みを感じやすい？感じにくい？」と題した2部構成で講演が行われました。各講演後には、市民との質疑



渡辺教授



伊藤理教授



中山教授（特任）



伊藤清顕教授



西須助教

応答が活発に行われ、盛会裏に終了しました。

本事業では、今後も継続して健康長寿社会の実現に向けた研究を推進し、その成果を論文発表や学内ホームページへの掲載等を通じて発信していきます。

科学研究費助成事業執行方法等説明会開催

令和6年3月28日（木）午後5時から、科学研究費助成事業（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）の執行方法等の説明会がオンラインシステムを用いて開催され、127名の参加がありました。

本説明会は、科研費研究代表者、研究分担者及び事務職員等を対象に、科研費の制度に関する理解の向上と適正な執行を確保し、不正防止等の徹底を図

ることを目的とするものです。

説明内容は、年間のスケジュール、補助金制度と基金制度の相違点、ルール改正、学内執行ルール及び補助事業遂行に当たっての留意点等、最近の研究費不正使用に関する事例紹介等であり、研究者等に対して不正使用防止に向けた注意喚起を図っています。

令和5年度長久手市大学連携推進ビジョン4Uワーキング 「ハーバリウム工作による癒し&プチ健康教育」開催

長久手市に設置される4大学(本学, 愛知県立大学, 愛知県立芸術大学, 愛知淑徳大学)と長久手市では、「長久手市大学連携推進ビジョン4U」を策定し、連携事業を実施しています。

その事業の一つとして、例年、各大学それぞれの特色を活かした「4Uワーキング」が行われており、令和6年2月10日(土)に、長久手市リニモテラス公益施設において、本学による「ハーバリウム工作による癒し&プチ健康教育」が開催されました。

このワーキングでは、本学の学生が講師となり、事前に申し込んだ約40名の市民の皆さんに健康教育の一環として熱中症(脱水)に関する講義をクイズ形式で開催するとともに、幅広い世代から人気のあるハーバリウムの工作を通じて交流を深めました。

長久手市大学連携推進協議会委員であり、学生を引率したシミュレーションセンターの船木淳講師からは「このワーキングを通じ、市民の皆さまからは



ハーバリウム工作を行う皆さん

医学生を身近に感じていただく機会になり、また、学生には市民から期待されていることを実感してもらうことができ、有意義な活動となりました。」との感想がありました。

今後も長久手市との連携による様々な取り組みが予定されていますので、地域における本学学生の活躍にご期待ください。

情報セキュリティ講演会開催

令和6年3月19日(火)午後5時から、大学本館5階マルチメディア教室において、情報セキュリティに関する意識向上・啓発活動の一環として、全教職員及び学生を対象に情報セキュリティ講演会(SD研修)が開催されました。昨年度と同様に、今年度も現地及びZoomによるオンラインでのハイブリッド形式で開催され、53名が参加しました。

講師には、株式会社ラック セキュリティーアカデミーの村瀬毅氏をお迎えし、「大学・医療機関で求められる情報セキュリティ及び身近にある脅威」と題して、最新の情報セキュリティ動向について、

事例等を交えてご講演いただきました。

受講後のアンケートでは、パスワード変更の頻度とその効果、情報漏洩防止の基本的なセキュリティ対策などについての質問がありました。出席者は情報通信サービスの変化による今後の情報セキュリティの重要性について、熱心に聞き入っていました。

本学では、引き続き情報基盤の整備を実施するとともに、情報漏洩が発生しないよう、教職員及び学生への意識向上、啓発活動に努め、情報セキュリティ対策に一層積極的に取り組んで参ります。

「大学コンソーシアムせと」設立20周年記念シンポジウムへの 本学学生の参加

本学が加盟する「大学コンソーシアムせと」が、令和5年度で設立20周年を迎え、令和6年2月23日（金・祝）に瀬戸市の瀬戸蔵で開催された設立20周年記念シンポジウムに、本学の学生が参加しました。

シンポジウムでは、午前中に令和5年度の活動成果報告会が開催され、午後に元SKE48の須田亜香里さんによる基調講演と加盟大学の学生及びファシリテーターによるトークセッションが行われました。

午前の活動成果報告会では、医学部2学年次生の黒田壘さんと宮地紗菜さんが、「大学コンソーシアムせと」の助成金事業である「大学生によるまちづくり活動」の成果報告を行いました。令和5年度は、「瀬戸の子どもたち！楽しみながらつながろう！」と題して、本学のボランティアサークルHIAMUと愛知淑徳大学の学生団体CCCが協力し、子どもたちが楽しみながら人と人の繋がりを感じ、楽しむことで新たな学びを発見することを目的とした活動を行いました。

午後のトークセッションでは、医学部2学年次生のHIAMU代表である久保田賢人さんが参加し、学生生活やまちづくり活動から得た学びについて加盟6大学の学生と意見を交わしました。各大学から様々な学生生活や地域との関わりから得た学びが挙げられ、学生たちにとって大変刺激のある



活動成果報告会の様子



参加した本学学生
(左から黒田さん、久保田さん、宮地さん)

時間となり、観覧した瀬戸市民の方からも好評を得られました。

ICT活用教育に係る講演会開催

令和6年2月16日（金）午後5時30分から、総合学術情報センター（ICT支援部門）主催による、ICT活用教育に係る講演会がオンライン開催され、47名の参加がありました。

講師には北海道医療大学薬学部教授・情報センター長の二瓶裕之氏をお招きし、「画像生成AIを取り入れたデータサイエンス教育の実践」と題してご講演いただきました。

講演では、北海道医療大学でのICT活用の経緯か

ら、DX推進計画の実施体制について、教職員の意識改革、学生一人ひとりに応じた学修支援を大学全体の問題として捉えることの重要性について説明がありました。また、画像生成AIの活用に関しては、技術の進歩に伴う画像生成の安易さについて、問題意識をもって責任ある使用をすることが大切であるとのお話がありました。参加者は近年重要性が高まっている教育現場でのAI導入について、事例と運用上の課題を交え、理解することができました。

令和6年度新規採用事務職員研修実施

令和6年4月1日（月）から4日（木）にかけて、新規採用事務職員7名を対象とした事務職員研修が実施されました。研修では、大学・大学病院・メディカルセンターの施設見学やコミュニケーションワークを通じて同期同士の仲を深めるとともに、電話対応及び文書事務、経理システムなど業務遂行に必要なスキルを学びました。また、内定期間中からグループで取り組んだ「愛知医科大学及び愛知医科大学病院の特徴」という課題に対して、配属部署の管理職の前で発表しました。

研修受講後のアンケートでは、「配属先についてだけでなく、大学、病院問わず様々な部署について学ぶことができ、職員としての自覚を持つことができました。」「電話対応研修は緊張しましたが配属先で役立つと思いました。」といった感想がありました。



新規採用事務職員の皆さん

これから6月にかけては、毎週金曜日に新規採用事務職員向けの事務組織研修を実施します。各部署の先輩職員を講師として、これから関わっていく事務組織一つひとつについて詳しく学んでいく予定です。

令和6年度新規採用職員ビジネスマナー研修実施

令和6年4月18日（木）及び19日（金）大学本館たちばなホールにおいて、令和6年度新規採用職員を対象とした、看護職員・医療職員・事務職員・技能職員合同のビジネスマナー研修が実施され、233名が参加しました。

研修は、両日同内容で開催され、座学だけでなくペアワークを行うことで、より実践的な研修が実現できました。社会人としての基本動作及び言葉遣い・敬語などビジネスマナーの基本を習得する内容で、ロールプレイングによる実践的な練習や全体での意見共有が行われました。

受講者からは、「ビジネスマナーを学び、自分も相手も気持ちよく働くために、マナーがとても大切であると学びました。」「患者さんや一緒に働く医



ペアワークを行う参加者

療スタッフに信頼してもらえるように、表情や声、使う言葉に気を付けていきたいです。」「ペアワークが多く、他職種の方と関わりながら学ぶ良い機会になりました。」といった感想がありました。

教授就任インタビュー



産婦人科学講座・教授

わたなべ かずし
渡辺 員支

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

令和6年4月1日付で産婦人科学講座の教授を拝命致しました。何卒宜しくお願い致します。

産婦人科は、妊娠・分娩・産褥女性の診療を行う産科と、腫瘍・内分泌・女性医学疾患を有する女性の診療を行う婦人科が存在します。産科は、大学病院の特性もあり、正常妊娠と妊娠高血圧症候群などの異常妊娠、内科疾患などを有する合併症妊娠など様々です。また、正常妊娠でさえも妊娠や分娩経過中に異常妊娠・分娩に急変する可能性があり、厳重な管理が必要です。産科スタッフとの連携を図り、母児が安全に産褥を迎えられるようにしたいと考えています。

婦人科に関しては、良性・悪性腫瘍を含めた手術症例が非常に多く、特に腹腔鏡手術などの内視鏡手術が多いのが本診療科の特徴です。安全な手術を心掛け、更に高度な医療を提供したいと考えています。

このように、地域医療を担った高度医療を提供するためにも、将来を担う若手医師やスタッフの育成は大学病院としても大変重要な役割です。患者のための日常の臨床業務とともに、若手医師やスタッフの教育と医療環境の整備についても尽力したいと考えております。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

産婦人科医師となったきっかけは、学生実習時に産婦人科指導医の先生と一緒に子宮頸癌患者の治療

に携わり、産婦人科入局を強く勧められたことからでした。それまでは外科医になるつもりでしたが、産婦人科でも婦人科癌を専門にすれば良いかと考え、産婦人科医師となりました。

しかし、教授から学位研究のテーマとして与えられたのは、「妊娠高血圧症候群の基本病態である母体血管内皮機能障害に対する酸化ストレスの影響について」と周産期分野であり、当時から30年近く経つ現在でも研究は続いており、ライフワークと言える仕事となっています。その研究は、妊娠高血圧症候群妊婦において産生亢進する活性酸素が、母体や胎盤の血管内皮障害を誘引し、母体の血圧上昇、腎機能障害、胎盤機能障害から胎児発育不全を併発することを証明したものでした。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

大学ではラグビー部に所属し、勉強よりもラグビーのために大学に通っていたようなところがあり、大学時代の成績は決して良いものではありませんでした。また、外科医を目指していましたが、産婦人科医師となることにしました。しかし、学位研究のテーマが周産期分野で、指導医が研究を中心に行っている先生であったため、臨床業務が終わった後、夜遅くまで研究をする毎日となりました。大学時代、決して優秀ではなく、長く大学で研究するとは思っていませんでした。ましてや、教授になるなんて考えたこともありませんでした。人生とは分からないもので、「分からないから面白い!」と痛感しております。どんな未来が待っているか分かりません。学生の皆さんもその時々を大切にして頑張ってください。



第42回西日本医科学生総合体育大会
平成2年7月28日(土)



輸血部・教授

なかやま
中山

たかゆき
享之

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

これからの輸血医療には、私が長年取り組んできた血液凝固学と細胞療法学の知識が必須になるとされています。また、平成29年から務めている中央臨床検査部の部長職は、これからも継続します。培った経験を統合的かつ効率的に運用して臨床サイドを強力にバックアップしたいと考えています。

例えば、大量出血の際には迅速な製剤供給が必要ですが、凝固障害が合併してくるため、こちらを是正しないと「輸血をした分だけ出血する」の繰り返しです。つまり、凝固データを素早く適切に判断して「止血能を回復させるにはどうしたら良いか」について救急や外科の先生にアドバイスを送ることが必要です。ここに、私の知識や検査部との連携が活きてきます。また、血液凝固異常症の診療をしっかりと行うことができる施設は全国的に見ても非常に少ないです。適切な医療を受けていない血友病患者さんも多いため、安心をお届けしたい。結果的に、病院収益にも貢献できれば嬉しいです。

二つ目は、本学を細胞療法のメッカにしたいと考えています。関西と関東では実践が進んでいて、京都大学や慶応大学のような強者も存在します。しかし、中部地域ではどこがイニシアチブを取るか未だ定まっていません。私には、First in humanの第一種再生医療等試験 [jRCTa040190133] を立ち上げた経験があり、細胞調整センターの管理運営、法的知識、品質管理、細胞培養等にも知悉しています。本学には細胞療法に興味を持つ医師も多く、優秀な輸血部スタッフも揃っています。本学が、中部地域における細胞医療のリーダーとなれる可能性は高いと信じています。ご支援よろしくお願い申し上げます。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

卒業して数年後に、名古屋大学血液内科へ大学院生として帰局したのですが、血液凝固グループに配属されました。それ以降、血液凝固学の臨床（血友病患者さんの診療など）と基礎研究を継続しています。海外留学を契機に研究テーマを広げようと思い癌の微小環境研究を開始しました。微小環境は、炎症性細胞、免疫細胞、血管、線維芽細胞、間葉系幹細胞などから成り立ちます。初めは、間葉系幹細胞のバイオロジーを研究していたのですが、炎症性疾患に対する治療薬や再生医療の原料として間葉系幹細胞が利用可能であると分かってきました。そのため、間葉系幹細胞を用いた細胞治療の研究を開始しました。その当時は、細胞療法を研究していると話すと、「それは何ですか」と問い返されることもありましたが。現在では、いくつもの製薬会社が細胞製剤を発売し、iPS細胞も実用化に向けて研究が日々進んでいるため隔世の感があります。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

私の学生時代と違い学ぶことが多いため忙しいと思いますが、スポーツに打ち込んだり、旅行に行ったり、自分の好きなことを追求したりして見聞を広めて欲しいです。また、卒業後の話ですが、1年でも良いので是非海外留学をしてもらいたいです。日本も発展したため、海外に行ってもあまり学ぶことは無いと言われて久しいですが、考え方やシステム構築方法、役割分担、エリート教育方針などは参考となります。是非実際に感じてください。私の留学先が、National Institute of Healthだったこともあります。アメリカは経済や軍事だけでなく科学技術においても覇権を絶対に譲らない強い意志を持っていると思いました。そのため、国家予算の適切な配分や優秀な外国人のリクルート法などを常に考えています。そういった戦略についても学べると思います。また彼らは、ワークライフバランス、家族との時間、人生の楽しみ方等も大切にしています。そういった人生観や死生観などに触れることで、自分の医師人生が豊かになるのではないのでしょうか。



オフショット

米国留学中、ホテルワシントンにて
(有名なワシントンD.C.のオペリスクを見ながら
食事することで人気がある。)



小児看護学・教授

しげもと さきこ
茂本 咲子

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

令和6年4月1日付で看護学部小児看護学の教授を拝命致しました。小児看護学領域では、胎児期から思春期・若年成人世代の発達過程にある、あらゆる健康状態のこどもとその家族を対象とし、そのこどもらしく、家族らしく生活することを支える看護について追究しています。豊かな人間性を持ち、こどもの立場に立って看護を創造していくことができる人材を育成していきたいと思います。

私はこれまで、こどもと家族の相互作用に着目して、低出生体重児の養育を支える継続看護に関する研究に取り組んできました。現在は、自作のFeedingアセスメントツールを活用して親の認識を共有し、こどもの育ちを支える看護について検討しています。また、新生児集中治療室や小児科外来の看護職者と協働して、自施設の課題を明確にし、その課題を解決するための方策を考案し、方策に取り組み、その成果を明確にする「看護実践研究」にも取り組んでいます。こども、家族、そして医療関係者と話し合い、パートナーシップを築くことが重要だと考えます。

今後は、高度実践看護師の教育体制の整備を見据え、本院や地域と連携・協働して、実践を基盤とした研究・教育活動に取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

小児医療に関心を持ったのは小学6年生のときです。腹痛の原因が虫垂炎だと分かったとき、医師と看護師が「薬を飲んで様子を見るか、手術するか、どちらがいい？」と私に尋ねてくれました。手術を選んだ私は、想像以上の痛みと闘うことになりましたが、それでも、家族や医療者に対する信頼と自分

で選択する責任を感じ、その経験から、人をみて人と関わる看護師になりたいと思うようになりました。

看護学部を卒業した後は、NICU / GCU、保健所、看護大学で勤務しました。こどもと家族が引き離されてしまったり、期待している育児と実際の育児にギャップを感じたりしている現状におつかり、何とかしたいと考えて大学院に進学しました。そこで、こどもと家族を主体としたケアを実践する難しさと重要性を学び、現在に至っています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

私の好きな言葉は「千里の道も一歩から」です。目の前にいる人や課題と向き合い、努力を重ねていくことで、自分の目標や世界の安寧に近づくことができると思います。皆さんが勇気をもって一歩を踏み出すことができるように応援しています。

一歩ずつ進んでいくためには、仲間の存在が必要不可欠です。私は学生時代、ほとんどの時間を同じサークルの友人と過ごしました。演奏旅行で全国を旅し、北欧や東欧に行く機会もあり、多様な価値観に触れることができました。授業をもっと聴いておけば良かったと反省していますが、共に過ごした友人とは今でも繋がっており助けられています。

皆さん、自分も仲間も大切にして、楽しく充実した大学生活を送ってください。



友人と美術鑑賞へ
(休日は家族や友人
と多言語活動、音楽
鑑賞、サッカー観戦
を楽しんでいます。)

—退職を迎えて— “長年の勤務お疲れ様でした”

長年にわたり本学に勤務され、本年3月31日をもって定年退職又は期間満了退職された方々から寄せられたメッセージをご紹介します。

なお、定年退職後も再雇用等により本学にご尽力いただける方もみえますので、引き続きのご活躍をご期待致します。



渡辺 秀人 先生
(分子医科学研究所第一部門・教授)

退職を迎えて

平成12年1月に本学に参りました。同年3月までは病理学第2講座・講師，同年4月に分子医科学研究所第一部門・助教授として異動，平成19年4月に同研究所長及び第一部門教授を拝命し，本学での計24年間，一貫して細胞外マトリックス／結合組織分野の研究に従事してきました。

学内では第三代医学部学術国際交流委員会委員

長，初代国際交流センター長として国際交流事業に従事してきました。また，知財委員会や組織換えDNA実験安全委員会等の委員長を務めました。これまで支障なく実務をこなすことができたのは，ひとえに関係者の皆さまによるご支援のおかげです。心より感謝申し上げます。

世の中の変化はあまりにも速く，様々な組織において情報の的確な選択・活用や，DX（デジタル・トランスフォーメーション）の導入による効率的な体制構築が求められています。教育・研究・診療の各々の分野で，この潮流に乗り遅れることなく，新たな発想や計画を果敢に実践し，本学が益々発展していくことを祈念しております。



山森 孝彦 先生
(外国語・教授)

英語が使える医師を育てる教育をめざした20年

平成16年に着任した当時，卒業生の多くが医局の抄読会で英語の論文が読めずに苦勞していました。「ジャーナルクラブ」という授業を立ち上げ，沢山の先生方に支えていただきながら毎年改良を重ね，英文読解のあとにグループ学習で質問を考え，集約された質問に答える形で課題論文を専門分野とする講師から解説を聞くことができる現在の形に落ち着きました。

学生たちの英会話力の底上げをするため，米国人大学生を患者役に見立てて英語問診を特訓する英語漬けの2泊3日夏の「国内英語キャンプ」も希望者を対象に平成21年からコロナ前の令和元年まで11年連続で行うことができました。

コロナ禍で1学年次生留年者が大量発生すると，上級生たちと医学部初年次学習法の選択講座を立ち上げ，その成果を講師役だった学生らが医学教育学会で発表する指導にも携わることができました。

愛知医科大学で過ごした20年間は夢のように充実した時間でした。お世話になった多くの皆さまに心から感謝申し上げます。そして，本学が益々発展していくことを祈念しております。



宮地 茂 先生
(脳神経外科学講座・教授)

温故創新

平成31年からたったの5年間でしたが、脳神経外科学講座の主任教授としてお世話になりました。脳神経外科の主要分野のエキスパートが揃ってくれたおかげで、数ばかりでなく、全国トップレベルの質の高い医療を提供できる集団となったことは嬉しい限りです。やる気のある若手医師も順調に入局して

くれるようになり、今後の新たな発展のエネルギーになると信じています。

最終講義でもお話ししましたが、私のモットーである「温故創新」を後進の皆さんには是非受け継いでいただき、「挑戦と改革」の精神を臨床や研究のみならず、自己研鑽の柱として自らのキャリアアップに活かしていただけたら幸いです。これまでお世話になりましたコメディカルスタッフの皆さん、ご指導いただきました先生方、そして、支えていただいた医局員、同門の皆さまに心より感謝申し上げます。愛知医科大学がこれからも小粒ながら光輝く大学として発展されることを祈念致します。



若槻 明彦 先生
(産婦人科学講座・教授)

将来の愛知医科大学の発展を祈念して

平成17年に本学教授として着任して、これまで大変お世話になりました。

病院関連では周産期と産婦人科手術を積極的に行い、平成27年には腹腔鏡下手術数が東海地区で最多となりました。平成29年には日本産科婦人科学会の四つのサブスペシャリティ領域の一つである日本女性医学学会の理事長を拝命しました。平成27年頃の本学会の会員数が2,000名程度でしたので、まずは会員数を増やすために様々な事業を展開して、現在では5,000名近くにまで増加しました。また、日本

医学会の分科会に加盟することもできました。

大学では平成30年に医学部長・医学研究科長を拝命しました。令和元年に医学教育分野別評価の受賞があったため、委員会を設立して皆で協力して作成した自己点検評価報告書を日本医学教育評価機構に提出し、高評価を受けることができました。令和2年からは未だ経験したことのない新型コロナウイルス感染症の蔓延のため、学生教育の制限を余儀なくされ、講義や臨床実習の対策には苦勞しましたが、幸い大きな問題もなく経過することができました。医学部長時代には大学をブランド化することを目標としてやってきました。今後、更に努力され、トップクラスの大学になることを期待しております。

これまでお世話になった医局員、教員の先生方、事務職員の皆さまに心より感謝申し上げます。19年間、ありがとうございました。



福澤 嘉孝 先生
(先制・統合医療包括センター・教授)

思いつくままに～過去・現在・未来

長期に亘り、本学医学部教授として、本学・本院に微力ながら尽力・貢献して参りました。しかし、「定

年」という言葉を聞く度に、私の研究テーマでもある【戦略的未病予防】が頭をよぎり、正に『光陰矢のごとし』の境地に佇んでいます。即ち、「Why we age and Why don't have to」だと思います。この現実を受け止め、長年のご支援・ご協力を賜りました皆さま、誠にありがとうございました。この約40年間は、「Science and Art」への具眼考究であり、学問への情熱や人間性の追求は、過去・現在・未来

において永劫であると確信しております。

我々の医学教育分野の足跡は、現在も引き継がれ、着実に進化・進展を遂げ、令和5年3月の医師国家試験で実を結んだものと思われまゝす。今後も更なる飛躍を期待しています。皆さまのお陰で、医学・医療を学ぶ喜びと責任を理解し、未来医師への自覚が改めて開花した気分です。

教職員一同が、医学・医療へのプロフェッショナルリズムを有し、仕事への情熱やマナーの重要性を認

識しており、素晴らしい学校法人だと感じている次第です。この「ワンチーム」重視の姿勢は、組織全体に良い影響を与え、協力と調和が根付く土壌を築いているものと推察されます。

退官に際し、この場をお借りし、心からの感謝と御礼の気持ちをお伝えします。これからも、皆さまのご健康とご多幸を祈念し、未来医療・未来医師育成に頑張っていたいただければ幸いです。



青山 めぐみ さん
(メディカルセンター看護部・
副部長)

39年間、大変お世話になりました。無事定年を迎えることができました。職場の皆さまに深く感謝致します。皆さまの更なるご活躍を祈っております。どうもありがとうございました。



丹羽 克也 さん
(財務・管理室・室長)

16年前の中途入職以来、人と運に恵まれた日々でした。新病院建設関係業務に携われたことが、一番の思い出です。今後の愛知医大に期待しています。ありがとうございました。



萩田 眞留美 さん
(看護部入退院支援センター・
看護師)

働き始めた時は、定年まで勤めることになるとは想像していませんでしたが、こうして無事定年を迎えることができたのは、皆さまのお陰だと心より感謝致します。



村上 英樹 さん
(メディカルセンター事務部・
技術監)

多くの方々に支えていただき、無事定年を迎えることができましたこと大変感謝しております。愛知医科大学の益々のご発展をお祈り致します。ありがとうございました。

※ 教授を除き、五十音順・希望者のみ掲載

医学部長・看護学部長 所信表明

令和6年4月19日（金）午後5時30分から、大学本館301講義室において、笠井謙次医学部長及び若杉実看護学部長による所信表明が対面とオンラインによるハイブリット型の講演会形式で実施されました。

始めに笠井医学部長から、所信表明として1期目の実績を振り返った上で、医学教育改革、入試制度改革、大学院・研究活性化、体制整備の四つのカテゴリーに分けて2期目の方策や意気込みが述べられました。とりわけ医学教育改革については、令和6年度から始まる新カリキュラムの狙いや特徴について提示され、国家試験合格率、留年率、学生の意識改革等への方策が強調されました。

続いて、若杉看護学部長から、所信表明として看護学部教育課程における教育改革の推進、看護学研究科における教育改革の推進、医学部・愛知医科大



笠井医学部長



若杉看護学部長

学病院・地域関連機関との連携強化による教育環境の整備及び質の高い教育を提供するための教員の教育力・研究力向上の推進の四つのカテゴリーにおいて、特に令和6年度に注力する事項を中心に方策や意気込みが述べられました。

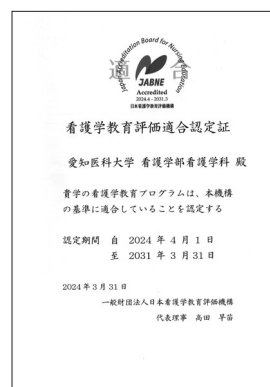
当日は、祖父江元 理事長を始めとする多数の教職員に出席いただき、両学部長が目指す学部運営のビジョンを共有することができました。

一般財団法人日本看護学教育評価機構 看護学教育評価認定

看護学部では、令和5年度に一般財団法人日本看護学教育評価機構（JABNE）による看護学教育評価を受審しました。この分野別評価は、より良い看護学教育の構築を目指して、各大学の自己点検・評価に基づき、看護学に特化した教育プログラムについて評価されるものです。

令和5年3月末に提出した草案への指摘事項を踏まえ、5月に自己点検・評価報告書等の本提出を行い、それを基に令和5年10月6日（金）に対面による実地調査が行われた結果、JABNEの評価基準において「適合」していると認定されました。認定期間は2024（令和6）年4月1日から2031（令和13）年3月31日までの7年間となります。

本学の長所・特色としては、「令和4年度のカリキュラム改訂において、他学部や大学病院との連携を活かし、時代の要請に合った科目設置が行われたこと。」「大学病院看護部と看護学部との連携において展開されている看護連携型ユニフィケーション推進事業」、「長久手市、尾張旭市、北名古屋



屋市と本学が締結している包括的協定に基づいて行われている看護実践研究センター地域連携・支援部門による組織的で活発な地域貢献」などが高く評価されました。

看護学部では、今回のJABNEによる評価結果を踏まえて、引き続き教育プログラムの充実を図り、時代が求める良き看護師の育成に取り組んで参ります。

～更なる国際交流の進展と充実を目指して～ 駐日イラク共和国臨時代理大使来学

本学医学部では、学術国際交流の進展に寄与するため、随時外国人の学術研究者を受け入れております。その中で、セイブ・イラクチルドレン・名古屋を通して、過去20年間で計16名のイラク人医師が本学にて医療技術・知識向上のため研鑽を積んでいます。

この度、令和6年4月8日（月）に、外科学講座（血管外科）で研修中のイラク人医師オマール ラビイ ハシム アルダハン医師の研修の視察を兼ね、駐日イラク共和国臨時代理大使であるペワン ジャセム イブラヒム ザウイタイ氏、セイブ・イラクチルドレン・名古屋の小野万里子理事長、塩之谷香副理事長、小原智恵氏及び白上直也氏が本学に来学され、教員・学生との交流が行われました。

来学時には、祖父江元 学長への表敬訪問が行われ、ザウイタイ臨時代理大使からは「オマール医師のように海外で医療を学び、帰国後に母国の医療の発展に寄与することは重要で、その機会を増やしていきたい。」とのお話がありました。



ザウイタイ臨時代理大使（前列左から2番目）
との表敬訪問時記念撮影

また、天野哲也副院長による本学病院施設の紹介や、外科学講座（血管外科）の医師及び学生との意見交換が行われ、本学への理解を深めるだけでなく、イラクと日本の文化・教育・医療の違いなどについての知見を広める良い機会となりました。

今後も、更に国際交流事業を充実させ、国際医療の発展に貢献できるよう一層努力して参ります。

看護学部長特別講演会開催

令和6年3月23日（土）午後1時30分から、看護学部棟N201講義室において、看護学部同窓会主催による坂本真理子看護学部長特別講演会が、「同窓生へのメッセージ：看護を考え続けることの意味」をテーマに、対面とオンラインのハイブリッド形式にて開催されました。

坂本先生の国内外におけるCommunity Nurseとしての活動や看護基礎教育の理想と現実、コロナ禍の体験から、悩んだときは物事の見方や捉え方を変えてみることで、「看護とは何か」、「看護にできることは何か」を日頃から考え発信すること、「旅」をしながら自身のメンタルヘルスに目を向け、ときには自身の成長のためにチャレンジすることの大切さを示されました。

当日は、看護学部卒業生1期生から21期生という幅広い世代の同窓生を始め、看護学研究科修了生、看護学部との関係が深い看護職及び学内の教職員の皆さまが集う機会となりました。

会場からは「自分の看護について振り返る機会となりました。」「看護の強みや魅力を自分の言葉で語り、学び続けることの大切さを感じました。」などの感想が多数寄せられ、看護の原点を考える感慨深い講演となりました。



講演する坂本看護学部長



参加者による記念撮影

分子標的医薬寄附講座の設置期間終了

分子標的医薬寄附講座は、学内の研究室及び国内外の企業と共同研究を行い、炎症やがんの進展に重要なシグナル伝達因子を抑える新しい分子標的医薬のシードを探索・開発することを目的として平成24年4月1日に医学部に設置されました。

設置後、講座責任者である梅澤一夫教授は、精力的に研究・教育に取り組まれておりましたが、誠に遺憾ながら令和6年1月12日(金)に急逝されました。このことを受け、本講座は12年間の設置期間を経て令和6年3月31日をもって講座終了となりました。

講座終了に当たり、梅澤教授の研究成果をご紹介しますとともに、梅澤教授のこれまでの貢献に感謝し、先生の安らかなご永眠を心よりお祈り申し上げます。

梅澤教授は、疾患に有効な低分子シグナル伝達阻害剤を探索し、新しい化学療法剤の開発基礎研究、及び阻害剤を用いた病態解析の研究を中心に行い、この12年間で約150本の論文を発表されました。動物実験で毒性を示さずに、強力な抗炎症・抗癌活性を示すNF-kappa B 阻害剤 DHMEQを見出し、注目

されました。また、臨床と新しい治療法の研究を密接にするため、DHMEQ軟膏(中国深圳万和製薬)や腹腔内投与抗がん療法(ロシア・PeritonTreat LLC)の企業導出を積極的に行われました。

一方、教育面では医学部1学年次「生体分子の化学」の授業を担当し、生体分子の構造と機能の関連の講義をされました。更に、医学部2学年次を対象にセミナーを開き、研究室で行っている培養細胞を用いたがん細胞の転移を抑える化合物の探索を紹介し、実践するなどの教育も行われてきました。また、積極的に留学生を受け入れ、若い世代の国際連携を進めるためにも尽力されました。

更に、日本癌学会、日本生化学会、日本化学療法学会の評議員、日本ケミカルバイオロジー学会の顧問、日本放線菌学会の理事、Oncology Research(米国国際誌)の編集長として尽力され、日本のみならず世界における創薬研究や教育の向上・発展に多大な貢献をされました。

先進糖尿病治療学寄附講座の設置期間終了

糖尿病性合併症とりわけ神経障害の発症メカニズムの解明とその治療法の確立に関する基礎的及び臨床的研究の推進を目的として令和3年4月1日に医学部に設置された先進糖尿病治療学寄附講座は、3年の設置期間を経て令和6年3月31日をもって講座終了となりました。講座終了に当たり、講座責任者の中村二郎教授からごあいさつがありました。

糖尿病性合併症とりわけ糖尿病性神経障害の発症メカニズムの詳細については未だ不明な点も多く、世界的に統一された診断基準も簡便な検査方法も確立されていないという現状を踏まえ、厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)による「糖尿病神経障害・糖尿病足病変の診断ガイドラインならびに管理法の確立」に関する研究では、全国多施設において糖尿病症例を集積し、横断的研究と縦断的研究を実施しました。最終的には、集積したデータを元に解析を進め、日本の臨床の現状に即した新たな診断基準を策定する

先進糖尿病治療学寄附講座・教授 中村二郎

ことができました。加えて、網膜症・腎症・動脈硬化症といった糖尿病性合併症と神経障害との関連性などについて、臨床データも用いながら多面的縦断的研究を行ってきました。また、糖尿病性神経障害の成因と治療及び糖尿病の病態に関する基礎研究として様々な課題に取り組み、着々と成果が得られていることから、糖尿病の先進的治療法の確立に繋がることが期待されます。

最後に、設立・運営に当たり本学関係者の皆さま及び企業様のご支援に心より御礼を申し上げますとともに、愛知医科大学の更なる発展を祈念致します。

令和5年度医学部FD講演会開催

令和6年1月18日（木）午後5時30分から、大学本館301講義室において、令和5年度6回目の開催となるFD講演会が、「地域医療教育の充実」をテーマとして開催されました。

講演会では、医学教育センターの早稲田勝久センター長から「本学の地域医療教育プログラムの紹介」があった後、地域総合診療医学寄附講座の宮田靖志教授（特任）による「地域医療実習の現状と今後」について説明がありました。クリニカル・クラークシップAの地域医療実習では、かかりつけ医の役割を知る、プライマリケアの必要性を理解する、地域包括ケアの概念を理解することなどを学修目標に行っています。

また、正規のプログラムの他に、全学生を対象とした多くの特別プログラム（岡崎医療刑務所見学、野宿生活の方の見回り相談など）を用意することで、普段の実習ではできない貴重な経験があったことについても紹介されました。実習をより充実したものにするためには、実習で経験したことを振り返り、今後の学修・行動にどう活かしていくのかを常に議論することが大切であるとのお話がありました。



講演を行う宮田教授（特任）

最後に、医学部4学年次生の深澤寛子さんから、実際に体験した地域医療実習において学んだことの紹介がありました。

地域医療は、地域によって求められるものが違い、その具体は多岐にわたります。本学は建学の精神に「地域社会に奉仕できる医師」を養成することが掲げられています。社会のニーズに応えられる医師を養成するために、今後、地域医療に関する実習の拡充を予定していますので、皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

令和5年度実験動物慰霊祭を挙行

令和5年度医学部実験動物慰霊祭が、令和6年3月6日（水）午後1時から実験動物供養塔前において厳かに執り行われ、医学の教育・研究の発展のための礎となった諸動物の冥福を祈りました。

慰霊祭では、初めに本学の医学研究のために貢献した動物の諸霊に対し、参加者全員で黙祷が捧げられました。続いて、笠井謙次医学部長から、瞑目した諸動物に対し、その尊い献身に感謝するとともに慰霊の辞として、医学研究の発展のため尊い犠牲となった動物たちの霊に哀悼の意が表され、今後とも動物愛護の精神に基づき、更に実験動物の愛護に努めることを誓いました。

その後、祖父江元 学長、笠井医学部長、佐藤元



哀悼の意を表する笠井医学部長

彦総合医学研究機構長、松下夏樹動物実験部門長に続いて、日頃動物実験や飼育に携わっている教職員や学生一人ひとりから白いカーネーションの花が献花台に捧げられ、諸動物の冥福を祈りました。

篤志献体者に文部科学大臣から感謝状贈呈

本学の解剖学教育のために献体いただいた次の方々に対し、文部科学大臣から感謝状が贈呈されました。

なお、感謝状の贈呈は、献体者のご遺族が受領を希望された方です。

安達 篤 殿	安藤 三夫 殿	伊藤 朗 殿	今村 桂三 殿	大津はるみ 殿
大坪タエ子 殿	大橋 百合 殿	岡本 幸子 殿	小栗 紀子 殿	神谷 貞光 殿
小池 弘 殿	後藤とし子 殿	近藤 慈胤 殿	酒井 幸弘 殿	貞任 健治 殿
柴田 千世 殿	下堀 正夫 殿	神藤 信雄 殿	田中知恵子 殿	鼓 美千代 殿
永井 義雄 殿	中島満智子 殿	名郷 純枝 殿	萩野 功 殿	藤澤 英司 殿
増田 憲子 殿	水野 勇 殿	村井 春雄 殿	山崎 一司 殿	(以上 五十音順)

看護連携型ユニフィケーション推進事業 令和5年度ヘルスアセスメント技術チェック実施

令和5年11月2日（木）午後1時から、看護学部棟N205及びN301講義室において、令和3年度から開始された看護連携型ユニフィケーション推進事業の一環として、看護学部1学年次生を対象としたヘルスアセスメント技術チェックが実施されました。この技術チェックは、初めての病棟実習の前に学生がバイタルサインズ測定を確実にこなせるようになることを目指しています。当日は、看護部の臨地実習指導担当者24名が参加しました。

学生は緊張した表情で技術チェックに臨んでいましたが、終了後に指導者からフィードバックを受け、臨床でのフィジカルアセスメントの実際を学ぶことができました。学生にとっては臨床で働く看護師にチェックしてもらうことで、自信に繋がるとともに自己の課題を明確にすることができる機会となりました。また、実習前に実際の臨床のイメージ化をすることができました。一方、指導者は学習段階や学



技術チェックの様子

生の特徴を把握することができ、自身の指導方法を振り返るきっかけとなりました。

今後も看護学部と看護部が協同し、看護学部生に対する教育内容の質向上を目指した教育計画を実施していきます。

令和5年度看護学部リーダーシップ研修開催

令和6年2月8日(木)午後3時30分から、看護学部棟N201講義室において、令和5年度看護学部リーダーシップ研修が開催されました。

本研修は今年度で2年目の開催となりますが、今回は近畿大学経営戦略本部長の世耕石弘氏を講師にお招きし、「知と汗と涙の近大流コミュニケーション戦略」と題して、大学界の常識にとらわれない広報を展開する近畿大学のコミュニケーション戦略について講演いただきました。より効果的な看護学部のPR活動を考える新たな視点への気づきに繋げるため、対象を看護学部にも所属する全教職員に拡げ、加えて、幅広い業界から講演依頼が殺到する講師であることから、看護学部以外の教職員にも参加を募り、この貴重な機会を共有しました。

講演終了後には、参加した多くの教職員が学部の



研修の様子

在り方について活発な議論を交わす様子が見受けられ、非常に有意義な研修となりました。

看護学部リーダーシップ研修は、学部の発展のために重要な研修の一つとして位置付け、これからも継続して行って参ります。

看護学部体験入学開催

令和6年3月22日(金)シミュレーションセンターにおいて「看護学部体験入学」が開催されました。

本企画は高校生が看護学部における講義を体験することにより、大学で看護学を学ぶことへの関心を深めていただくことを目的として開催しています。

当日は38名の高校生が参加し、臨床実践看護学の橋本茜講師による体験授業「一次救命処置と二次救命処置」及び体験演習「高機能シミュレーターを用いて救急救命処置を学ぼう！」が行われました。授業・演習では臨床現場を再現し、医療従事者が行う胸骨圧迫や人工呼吸などの一次救命処置を学びました。最後に、看護学部生と一緒に実習室や教室を見学し、交流会が行われました。

参加した高校生からは、「救命について学べて良かった。もし、倒れている人がいるときにしっかり



演習を行う高校生たち

実践できると思った。」、「学生さんの生の声を聞き、今までより大学生活を想像することができました。」などの感想が寄せられ、参加した高校生にとっては、看護学の一端を学ぶ有意義な体験となりました。

新入生ガイダンス実施

令和6年度入学生を対象としたガイダンスが、医学部・看護学部ともに4月7日（日）から12日（金）までにかけて実施されました。

◆ 医学部ガイダンス概要

4月7日（日）
医学部長メッセージ
事務連絡等

4月8日（月）
学生生活について
学生相談室の紹介
医学部のカリキュラムについて
・6年間のカリキュラムについて
・1学年次のカリキュラムについて
・履修上の注意及び試験に関する注意
・単位認定・進級留年及び成績評価（GPA制度）
授業，試験等について
基礎科学ガイダンス
実習衣採寸・注文

4月9日（火）・10日（水）
新入生研修

4月11日（木）
ICTに関するガイダンス
同窓会について
学生生活ガイダンス
課外活動紹介

4月12日（金）
防災関係ガイダンス
施設紹介
医学部学生総合補償制度のご案内
ハラスメント防止講演会，防犯講習会，サイバーセキュリティ講習会

◆ 看護学部ガイダンス概要

4月7日（日）
看護学部長メッセージ
事務連絡等

4月8日（月）
教務関係オリエンテーションⅠ～Ⅳ
総合学術情報センター（情報基盤部門）利用講習会
学務情報システム説明・Web掲示板説明

4月9日（火）
同窓会紹介
総合補償制度Willに係る説明
学生相談室紹介
国際交流会紹介
事務手続き案内
書類提出（学納金，奨学金等）
ロッカー案内

4月10日（水）
学校生活関係オリエンテーション
メールシステム利用説明
防災関係ガイダンス
施設紹介（運動療育センター，愛知医大サービス，図書館）
講義関係案内
教科書販売

4月11日（木）
健康管理ガイダンス
新入生研修

4月12日（金）
講義関係案内（ICT関連）
ハラスメント防止講演会，防犯講習会，サイバーセキュリティ講習会

令和6年度医学部新入学生研修実施

令和6年4月9日(火)及び10日(水)シミュレーションセンターにおいて、令和6年度医学部入学生を対象とした新入生研修が実施されました。

1日目、まずは、鈴木耕次郎教務部長と医学教育センターの早稲田勝久センター長から、学生生活の心得、本学カリキュラムの紹介、医学教育センターの紹介がありました。次に、自己紹介を兼ねたグループ作りを行いました。その後、薬理学講座の丸山健太教授、生物学の武内恒成教授から「基礎医学の学び方」と題し、先生方のキャリア紹介及び基礎医学の面白さなどを講演していただき、2・3学年次生の先輩からは、学生生活を始めるに当たってアドバイスを貰いました。

午後からは「あなたはなぜ医師を目指すのか」についてグループワークを実施し、学生は作業を通して徐々に打ち解け合い、活発に議論する姿が見られました。

2日目は、先輩医師からのメッセージとして、内科学講座(循環器内科)の大橋寛史助教から、自身の学生生活を振り返りながら1学年次生に対する激励と温かいメッセージをいただきました。次に、「医師になるために何が必要か?」と題したグループディスカッションが行われたほか、基礎科学・基礎医学の先生方にご協力いただき、教員と自由に話すことができるセッションが設けられました。学生は教員から直々に勉強の仕方や、どのように大学生活を過ごして欲しいか等、様々なテーマで話すことができ大盛況でした。午後からは本研修の締めくくりとして、KJ法を用いて「どのような6年間にした



研修を受講する新入生



教員とのグループディスカッションの様子

いか」について各グループで議論し、漢字一文字で表してもらいました。学生からは「翔・挑・木・目・愛・向・積・力・頂・繋・実・誠・生・絆」という一文字が発表され、この想いを忘れずに6年間を過ごされることを期待したいと思います。

本研修終了後のアンケートでは、「同級生や教員と交流する機会が得られて良かった。」、「医学という分野により一層興味を持つことができた。」、「医学生としての自覚を持つ機会になった。」など好印象なものが多く、プログラムにご協力いただいた教職員の皆さまに感謝致します。

令和6年度看護学部新入生研修実施

令和6年4月11日（木）に「社会に求められる看護専門職者に向けて、はじめの1歩を踏み出そう」をテーマとした新入生研修が実施されました。本研修は、新入生が上級生との交流を通して専門職者としての振る舞いやマナーを知り、大学で主体的に学ぶことへの動機付けができるようになることを目的としています。

午前の部では、株式会社マイナビから講師を招き、「大学生として身に付ける接遇・マナー」についての講演が行われ、大学生としてだけではなく看護学生として身に付けておくべき接遇・マナーを学びました。

午後の部では、少人数グループで学内施設を見学する「キャンパスツアー・オリエンテーリング」が行われました。学内各所に上級生と「ミニゲーム」をする交流ポイントや本学に関する「愛知医科大学クイズ」を回答するチェックポイントが設けられ、新入生も初めは緊張していましたが、時間が経つにつれ笑い声も聞こえ、親睦を深めることができました。

また、「先輩との交流」と題して上級生と新入生の座談会が行われました。新入生からはこれからの大学生活についてなど多くの質問が寄せられ、上級生が各



大学生として身に付ける接遇・マナー講演の様子

自の体験談を交えて回答する場面がありました。新入生の大学生活に関する不安が解消でき、充実した時間となりました。

最後に、本研修を振り返り新入生研修を通じて学んだこと、感じたことを個人レポートとしてまとめました。

新入生にとってこれからの学生生活を送る上で、非常に有意義な一日になったことと思われます。

令和6年度医学部成績優秀者表彰

医学部では、成績が上位で出席状況及び勉学態度等が他の模範となる各学年5名の学生に対し、本人の学習意欲の高揚を図るために顕彰制度を設け表彰しています。

今年度の表彰式は、令和6年4月23日（火）午後5時30分から、大学本館711特別講義室において、令和5年度の成績が優秀であった医学部2～6学年次生の学生計25名を対象に行われました。

表彰式では、受賞者に対して祖父江元 学長から表彰状及び記念品が授与されるとともに、「皆さんの日々の努力に対し敬意を表したい。学生生活で自分が将来どのようなドクター或いは研究者になりた



いかを深く考えてほしい。」とのお話がありました。

式終了後には成績優秀者全員での記念撮影【写真】が和やかな雰囲気で行われ、学生同士でも役職者と撮影するなど、喜びを分かち合っていました。

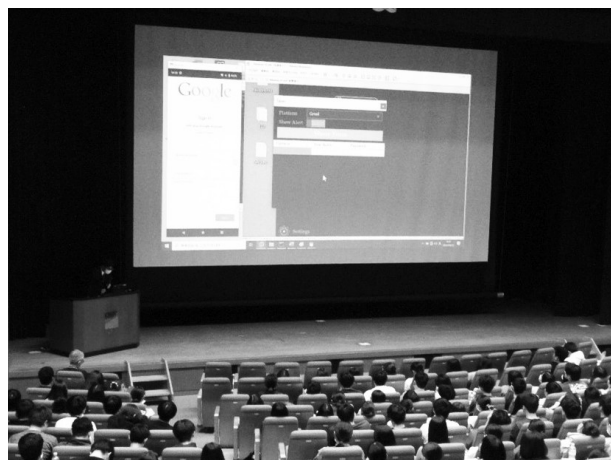
ハラスメント防止講演会・防犯講習会及び サイバーセキュリティ講演会開催

令和6年4月12日（金）の新入生ガイダンスにおいて、新入生が安心・安全に学生生活を送ることを目的とし、「ハラスメント防止講演会」、「防犯講習会」及び「サイバーセキュリティ講演会」が開催され、医学部及び看護学部の新入生245名が参加しました。

ハラスメント防止講演会では、公益財団法人21世紀職業財団のハラスメント防止コンサルタントである新美智美講師から大学におけるハラスメントの基礎知識や難しさ、被害にあった場合の対処方法などについて具体例を交えながら説明いただきました。

防犯講習会では、愛知警察署より生活安全課の渡辺氏を講師に迎え、宗教団体に関する注意喚起、薬物に関する講話、防犯に関する講話をテーマごとにご講演いただき、若年層にも増大している大麻を中心とした薬物や、気付かないうちに巻き込まれがちな犯罪について注意喚起がありました。

続いて、愛知警察署本部警備部警備総務課サイバー攻撃対策隊の横井氏を講師に迎え、サイバーセ



サイバーセキュリティ講演会の様子

キュリティ講演会が開催され、情報セキュリティ上の脅威、サイバー攻撃・犯罪の手口、サイバー攻撃・犯罪への対策について説明いただきました。

講演後、学生にはアンケートが実施され、「セキュリティ強化について意識していきたい。」などの感想がありました。

春の交通安全講習会開催

令和6年4月18日（木）午後6時から、大学本館たちばなホールにおいて、医学部・看護学部の学生を対象に、「春の交通安全講習会」が開催され、両学部合わせて約250名が参加しました。

講師を依頼した愛知警察署交通課交通総務係の伊藤氏から、「愛知県の交通情勢は非常に悪く、交通事故で亡くなる方はたくさんいます。皆さんには他の模範となる運転を行うとともに、『防衛運転（かもしれない運転）』を心掛けていただきたい。」との願いがありました。

また、駐車違反についても講話いただき、一人の駐車違反によって大学全体のイメージ低下に繋がる危険性があり、将来医療従事者となる皆さんは絶対に交通違反をしないようにと注意喚起がありました。

更に、スマートフォンの普及率が上がるにつれ問題となっている、「ながら運転」によって交通事故に遭い亡くなられた方のご遺族についてお話いただきました。

最後に、横断歩道における運転者及び歩行者に関



伊藤講師の講習を受講する学生たち

する交通法令順守の重要性を訴えるDVDを視聴し、講習会終了後には、交通安全に対する確認テストがWebにより実施され、「友人を待つために車を停めることは、5分以内であっても駐車になる」等の交通規則のテストが行われました。

今後も、学生一人ひとりが安全運転への意識を高めることができるよう、啓発活動を続けていきます。

定年退職教授最終講義

令和6年3月で定年を迎えられた5名の教授の最終講義が大学本館たちばなホールにおいて行われました。長年にわたり、本学の発展に多大なる貢献をしていただき、また、本学の医学教育に対しご尽力くださいました先生方の最終講義には、学内外から多数の方が聴講に訪れました。ここに、先生方の最終講義の様子についてご紹介致します。

産婦人科学講座

若 槻 明 彦 教授 2月9日（金）

【医師人生の40年間を振り返る】

若槻教授は、平成17年5月に本学にご着任以来、医学部学生に対する講義・実習、大学院での研究者の育成など、大変な熱意を持って教育・研究指導に当たってこられました。一方、平成30年4月から令和4年3月まで医学部長を務められました。

最終講義では、胎児脳ミトコンドリア研究、羊胎児の慢性実験、エストロゲンを含めた女性ホルモンと脂質代謝や血管内皮機能との関係、脳性麻痺の予防実験等に始まり、日本女性医学学会理事長を務められ、ホルモン治療のガイドライン作成等、女性医学分野の発展に尽力されたことを詳しく説明していただきました。

また、講義の後半には、医学部長在任中に組み込まれた大学運営や教育改革、入試の男女比問題、医



師国家試験対策強化委員会の活動等の強化による国家試験合格率向上、医学教育分野別評価の認定取得、更に新型コロナウイルス感染症蔓延時における臨機応変な対応など多大なる本学への貢献実績をお話していただきました。

講義の最後には、長い間、支えてくださった医局の先生方・スタッフ・教職員の皆さまに深く感謝の言葉を述べられ、講義を終えられました。

先制・統合医療包括センター

福 澤 嘉 孝 教授 2月13日（火）

【思いつくままに～過去・現在・未来～】

福澤教授は、平成18年10月に新たに設置された本学大学院医学研究科（医学・医療教育学）、医学教育センター教授（特任）としてご就任以来、大変な熱意を持って医学部学生、研修医に対する医学教育を実施、並びに研究に従事されてこられました（含、消化器内科兼務）。

最終講義では、南イリノイ大学医学部での米国式医学教育の体験、医学教育視察・研修等に始まり、



平成27年4月から、がんの発症リスクをmRNAの解析応用によって5段階評価し、単なる予防では

なく、戦略的予防法システム（含、国内外初の先制医療・統合医療包括センター創設）を構築・確立・発展され、生活習慣病全般に関する種々研究に精力的に取り込まれたことを詳しく説明していただきました。

また、平成18年10月から、医学教育センター教授兼センター長就任後には、GPA導入、成績下位の医学生への予備校の活用、総合試験等の合格ライン

のカットオフ値の上昇、総合試験回数、その他の参加型臨床的試験回数の増加等を行い、本学の医学教育の発展に多大なる貢献をされたことをお話ししていただきました。

講義の最後には、若手医学生や医師に贈る言葉の中で、「人には多大な可能性がある。」「勇気を持って何事にもチャレンジすれば、そこには必ず道が開けるだろう。」と講義を締めくくられました。

外国語

山 森 孝 彦 教授 2月14日（水）

【英語が使える医師を育てる教育をめざして】

山森教授は、平成16年4月に本学にご着任以来、医学部学生に対する講義等において大変な熱意をもって教育指導に当たってこられました。初年次医科学セミナーや基礎科学プレチュートリアル等の講義を始め、基礎科学部門教員として1学年次生の教育を担当され、現在まで医学英語の科目責任者として精力的に教育に取り組まれてきました。

最終講義では、20年間にわたって従事された医学英語教育の歩みについて、医学部向けの英語教育の概要、論文講読演習Journal Clubの立ち上げ、医学英語教育学会での口演発表、学部生の学会発表と論文執筆の支援、更には医学生のための英語キャンプ等、詳しく説明していただきました。

講義の後半には、教育研究について、日本の医学生に特化した医学英語教育プログラムの構築や「医



学部低中学年を対象とした英語医療面接指導のための評価ルーブリックの開発」の研究等にご尽力されたことをお話ししていただきました。

講義の最後には、今後も医療英語を用いて医学英語教育に精力的に携わっていきたいと語られ、1秒も飽きさせない講義をするためには、「授業は舞台、教室は劇場、台本を練り上げ、リハーサルを徹底して行うようにしている。」と述べられ、講義を締めくくられました。

脳神経外科学講座

宮 地 茂 教授 2月15日（木）

【「温故創新」－愛知医大に伝えておきたいこと】

宮地教授は、平成29年4月に本学にご着任以来、医学部学生に対する講義・実習、大学院での研究者の育成など、大変な熱意を持って診療・教育・研究指導に当たってこられました。

最終講義では、恩師との出会いと教え、ナンシー



大学での留学経験、日本脳神経血管内治療学会の活動に始まり、実験的動脈瘤モデルを用いた各種治療の病理学的検討、硬膜動静脈瘻の実験モデルの研究、脳血管内治療へのロボティクスの応用等の研究について、詳しく説明していただきました。

講義の中盤には、タイトルの由来について「知るだけでなく改めて作り出す」ことが大切であると語られ、動脈瘤の血管内治療、AVMの血管内治療、頸動脈狭窄症の血管内治療（CAS）、セミナーやワー

クショップの開催、数多くの教科書執筆等、脳血管治療の向上発展に尽力されたことをお話ししていただきました。

講義の最後には、これからの愛知医大生へ望むこととして、「まだ誰も見たことのない景色を見に行こう、まだ誰も踏み入れたことのない山を越えて行こう。」という歌詞を引用し、挑戦と改革を大事にしてほしいと述べられ、講義を締めくくられました。

分子医科学研究所第一部門

渡辺 秀人 教授 2月21日（水）

【ご機嫌麗しゅう】

渡辺教授は、平成12年1月に本学にご着任以来、大変な熱意を持って研究指導・教育に当たってられました。平成19年4月からは分子医科学研究所第一部門教授、同研究所長を務められ、本研究所の発展にご尽力されました。

最終講義は、二つのパートに分かれており、前半では教授が一貫して研究してきた細胞外マトリックスの構築と機能、病態への関与に関して、大学院時代や海外留学での経験等を含めて説明されました。本学ではプロテオグリカン、特に、パーシカンの機能と代謝に関して、論文には記載されていない裏話を披露されました。また、戦略的研究基盤形成支援事業、私立大学研究ブランディング事業への取り組みに関してもお話しいただきました。

後半では、「昭和の考えでは令和は生きていけな



い」と、目まぐるしく変化する現代に対応した取り組みの重要性を力説されました。更に、本学での思い出話、知の集結とも言える大学の価値に関しても言及されました。そして、最後に「ものを大切にし、人には丁寧に接し、些細なことにも喜びを感じられるようにして穏やかな心で日々を送る、そして、できれば美しい日本語を話す。」という言葉で講義を締めくくられました。

学術国際交流協定大学への医学部学生留学体験記

本学では、学術国際交流協定大学と学生の交流活動を中心に積極的に活動しております。そのプログラムの一環として、協定大学の2学年次カリキュラム受講（PBL）コース及び臨床実習選択（Elective）コースへ本学医学部学生を派遣しています。

令和5年度は、合計22名の学生が同コースへ留学しました。この留学を終えた学生から寄せられた体験記の一部をご紹介します。

2学年次カリキュラム受講（PBL）コース

大学名	期 間	人 数
南イリノイ大学（SIU）	令和6年3月9日（土）～令和6年4月1日（月）	6

臨床実習選択（Elective）コース

大学名	期 間	人 数
南イリノイ大学（SIU）	令和6年1月27日（土）～令和6年3月25日（月）	1
コンケン大学（KKU）	令和6年3月2日（土）～令和6年3月31日（日）	10
タマサート大学（CICM）	令和6年2月24日（土）～令和6年3月24日（日）	2
ウッチ医科大学（MUL）	令和6年2月23日（金・祝）～令和6年3月24日（日）	1
ボズナン医科大学（PUMS）	令和6年2月23日（金・祝）～令和6年3月25日（月）	2

南イリノイ大学（SIU）2学年次カリキュラム受講（PBL）コース

医学部4学年次生 山田 英倫子

この度、南イリノイ大学に留学させていただき、アメリカの医療と医学教育について多くの学びを得ました。PBLの症例検討では、飛び交う英語のスピードに圧倒されながらも、学生同士が議論を活発化させている様子に強く感銘を受けました。また、身体診察の練習や、病院施設を再現したシミュレーションセンターの見学を通し、実践的な医学教育を学びました。

3週間、友人や先生方と積極的にコミュニケーションをとることで、文化を理解し、感動を分かち合うことができました。アメリカでの経験は私の人生において大きな糧となったと思います。このような素晴らしい機会を与えてくださった全ての方々に



医学部長Dr.Kruse（中央）と山田さん（左から2人目）

深く感謝申し上げます。この思いを胸に、今後も勉学に精進して参ります。

南イリノイ大学（SIU） 臨床実習選択コース

医学部 6 学年次生 高柳 志津子

南イリノイ大学に2か月間留学に行く機会をいただきました。今回、私が参加したElectiveコースでは、回りたい診療科をある程度選択することができました。実習内容としては、内科系の診療科では主に外来を見学し、外科系の診療科では基本的にレジデントにつき、ほとんどのオペで術野に入らせてもらいました。特に、外科系の実習は毎日朝から夕方まで忙しく、非常に充実した日々を過ごしました。レジデントやアテンディングの先生方を始め、多くのスタッフが非常に親切に接してくださり、多くの学びがありました。

外国で臨床実習をするという貴重な経験を学生のうちにさせていただいたことを大変有り難く思います。



泌尿器レジデントの先生方と高柳さん（最前列中央）

コンケン大学（KKU） 臨床実習選択コース

医学部 6 学年次生 村松 優樹

私は、タイ王国の東北地方にある国立コンケン大学の形成外科で再建外科について学びました。私が実習でお世話になった形成外科講座では、交通外傷や先天異常に対する再建手術だけでなく、日本では自由診療に当たる美容外科手術も多く行っていました。また、再建手術数はタイ王国内でNo. 1の手術件数を誇っており、マイクロサージェリー（顕微鏡下で血管吻合を行う手術）は週4回見学しました。

更に、シミュレーションセンターが充実しており、実際に手術で使うマイクロサージェリーの機械で鶏肉の血管吻合練習をする機会が沢山ありました。これは、形成外科医を目指す私には、とても貴重な経験となりました。先生方は大変友好的で、私達に対して英語を使い親切にしてくれました。回診の際も現病歴や手術所見を丁寧に説明し、



鶏肉を用いた血管吻合を行う村松さん

術中も解剖や術式のことを分かりやすく教えていただきました。

1か月という非常に短い期間ですが、異文化交流も含め大変充実した実習となりました。

タマサート大学チュラポーン国際医学部（CICM） 臨床実習選択コース

医学部 6 学年次生 中村 元臣

私は、タイ王国の首都から車で50分程度の距離にあるタマサート大学で実習を行いました。今回の実習を通じて、改めてコミュニケーションの大切さを

学ぶことができました。実習は英語圏に留学経験のある教授や研修医などに担当していただき、初めのうちは大変緊張し、苦労しました。しかし、疾患に

よっては言っている意味が理解できて、本学の実習で得た知識が通ずることもあったと知ることができました。また、外来やオペ中でも質問すれば、こちらが分かるまで丁寧に何度でも教えてくださり、留学生に対する指導の熱意が感じられました。

タマサート大学での留学は、私たちの学年からの試みであったため不安なこともありましたが、来年で降も是非、タマサート大学のプログラムに参加することをお勧めします。



タイ王国のワット・ポーにて
米国UCLAの学生と中村さん（右から2人目）

ウッチ医科大学（MUL）臨床実習選択コース

医学部6学年次生 堀田 春花

実習先のBarlickiego病院の脳神経外科は、Jaskólski教授を中心に年間2,000例を超える手術件数を誇ります。日々、多様な手術症例に溢れる環境の中、症例毎に執刀医から術式を説明していただき、各疾患に対するアプローチの理解が深まる毎日でした。

週末は、現地の医学生と共にポーランド中を旅行し、計13都市を巡りました。コロナ禍以前に本学へ留学していた学生達と旅先で再会した時は、4年ぶりに海外実習が開始された喜びを改めて実感しました。1か月という限られた時間の中で、期待を遥かに超える経験ができたのは、留学をサポートしてくれた家族、現地で私を受け入れてくださった医師と医学生のおかげです。



神経内科の先生方と堀田さん（左）

ポズナン医科大学（PUMS）臨床実習選択コース

医学部6学年次生 野中 葉月

私は腎臓内科に興味があるため、腎臓内科・腎移植科及び小児腎臓科にて4週間実習をさせていただきました。日本の医学教育に比べ、ハイレベルな教育を受けている点がとても印象的でした。特に、印象的だった点は、母国語のポーランド語だけではなく英語を用いたディスカッションを取り入れることによって、国際的に活躍のできる医師を目指す取り組みをしている点や、国内最大規模のシミュレーションセンターで4学年次から6学年次にかけてコンペティションを通して実際の医療現場を想定した現場の対応方法を学ぶ取り組みに力を入れている点です。

今回の実習を通して、いま持っている自分自身の臨床能力の低さを痛感しました。濃密で楽しかった



シミュレーションセンターの開設者と野中さん（右）

1か月の生活とともに、より今後の実習における学習意欲が高まる良い経験となりました。

学術国際交流協定大学への看護学部学生短期留学体験記

看護学部では、米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学フランシス・ペイン・ボルトン看護学部及びタイ王国マハサラカム大学看護学部と教員・学生の交流を含む包括的な相互交流を行っています。令和6年3月に看護学部学生9名が留学しました。短期留学を終えた学生の体験記の一部をご紹介します。

ケース・ウェスタン・リザーブ大学短期留学

看護学部3学年次生 浜田 唯衣

今回、10日間の短期留学に参加し、様々な学びを得ることができました。私が今回の短期留学で目標としていたことは、病院や大学を見学し日本との相違点を見つけること、それを通して自分が行いたい看護を求めることでした。今回のプログラムでは、ケース・ウェスタン・リザーブ大学の講義・演習・実習の見学、がんセンターや小児病院、ホスピスなどの見学を行いました。

講義や演習では、日本とは違い、少人数で授業が進められ、学生が活発に発言している姿が多く見られました。学生は授業中分からないことや疑問点を積極的に質問してその場で解決しており、学生の授業に対する意識や態度に感心しました。

また、コミュニティ実習の見学では、学年の違う複数の看護学生でチームを作って地域の小学校の児童の身体測定を行っており、看護学生の主体性を重視した実習を行っていました。

更に、病院やホスピスの見学では、ナースコール



留学生による記念撮影

が患者に聞こえないような工夫がなされており、院内がとても静かで、患者がリラックスできる空間が広がっていました。その他、患者がセラピーを利用しやすい環境づくりがなされていました。病院見学によって、最先端の機器や、治療の上で重視していることの違いなどを学ぶことができました。

マハサラカム大学短期留学

看護学部4学年次生 酒井 梨名

私が短期留学に志望した最も大きな理由は、今しかできないことを経験したかったからです。今回のプログラムでは、病院の視察や、現地の看護学生との交流、タイ王国の生活や文化の体験等を行いました。それら全てが普通の海外旅行ではできない経験で、看護学生である今だからこそできることだと感じました。

病院の視察では、タイ王国と日本の医療体制の違いを学ぶことができました。特に、印象に残ったことは、「ヘルスボランティア」という地域で活躍する方々がいるということです。タイ王国では、体調不良を感じた時は、病院に行く前にまずヘルスボランティアに相談し、退院後もヘルスボランティアが患者を支えるなど地域密着型の医療が行われているということに驚きました。

また、現地学生との交流では、一緒にご飯を食べ、ウェルカムパーティーでお互いの国の文化を伝えあい、研究発表をするなど密に交流することができ



現地学生と留学生による記念撮影

した。文化体験では、フィールドワークを行いました。自然の中にもタイ王国独自の文化が多く根付いており、実際に見て、触れて、味わってと五感を使って多くの体験ができました。短期留学で貴重な経験を沢山させていただき、この充実した8日間は私の一生の思い出になりました。

医学部学外体験実習体験記

令和5年度医学部2学年次の地域社会医学実習が令和6年1月26日（金）から30日（火）にかけて行われました。各施設のご協力の下、心身障害者施設や児童養護施設に加えて、長久手市役所や尾張旭市役所、地域の事業所での産業保健インターン実習、更に消防本部での救急車同乗実習が行われました。学生は、学外での様々な経験により、医療人として社会に出るためのモチベーションが高まりました。実習を終えた学生の感想文を紹介します。

実習施設：尾三消防本部

医学部2学年次生 伊原 静葉

今回、私は尾三消防本部長久手消防署で地域社会医学実習をさせていただきました。救急車には2日間合計3回同乗しました。その中でも特に印象に残ったのは、救急隊の方々の意識の高さです。救急車が要請を受けて出動する際には、患者さんが大きな事故や急病により重症の場合もあれば、転倒による怪我など軽症の場合もあり、実際に私も今回の実習期間中に重症患者の搬送と軽症患者の搬送のどちらも経験しました。今まで私は救急の実情を知らず、ニュースなどのメディアで緊急性の低い患者さんが救急車を利用することで、本当に必要な人に救助が行き届かないと報道されているのを見ては複雑な感情になり、どうしても必要な時にだけ救急車を呼ぶように、どうか工夫はできないのかと考えることもありました。医師として働くことになる以上、より多くの患者さんの命を救うことが最優先だという考えが気付かぬうちに染み付いていたのかもしれませんが。今回、長久手消防署で実習させていただいて、やはり軽症の患者さんが多いことも事実でした。しかし、救急隊の方々は、どんな症状の患者さんでもしっかり話を聞き、訴えに共感し、責任を持って受け取り先の病院に搬送していました。ある救急隊の方が「どの患者さんも早く病院に行って診てもらいたいという思いで救急車を呼んでいるから、本人が拒否する時以外は基本的に搬送する。」とおっしゃっていたことがとても印象的でよく覚えています。どんなときでも全力で目の前の患者さんに優しく安心できるような声掛けをする救急隊の方の意識の高さに感動し、やはり、救急隊の方々も医師も患者さんも一人の人であり、寄り添うことが最も大事であると自分の中で再確認しました。

また、毎日朝から救急車内の物品のチェックをしているところにも意識の高さを感じる部分でした。救命処置を行う救急隊にとって、必要な物品があるか確認しておくことは当たり前であるかもしれませんが、その確認の仕方も、とても丁寧に毎日継続して行うためには並外れた努力が必要なことは容易に想像できました。例えば、チェックリストを用いて確認する際に所定の場所にあることだけを確認するのではなく、機械の電源を点けて正常に稼働するかということまで見たり、酸素ボンベは残りがあまるかないかなだけではなく、どのくらい残っているかまで記録しておいたりしていました。救急車の要請があって出動したとしても、確認を怠っていたことが原因で使える器具に制限がかかると最悪の場合、そのせいで救える命も救えなくなってしまうことも考えられるため、できる限りの準備はしていこうという姿勢を見たことで、私も将来患者さんに対する向き合い方について、今一度考え直すきっかけをいただきました。

私は医学部に入学する前から今までずっと、「この人になら家族や友達、大事な人を安心して任せられる。」と思ってもらえるような医師になりたいと考えてきました。今回の実習に参加したところ、全力で患者さんを救おうとしている救急隊の方々は正に私が理想としていた人物像そのもので強い憧れを抱き、自分になりたい医師像をより鮮明に思い描くことができるようになりました。たくさんの忘れられない経験をさせていただいて、とても勉強になりました。実習先に消防署を希望して本当に良かったです。

看護学研究科特定行為研修修了証授与式挙行

令和6年3月2日（土）午前9時から大学本館役員会議室1において、令和5年度特定行為研修修了証授与式が挙行されました。

式では看護学研究科高度実践看護師（診療看護師[NP]）コース修了者一人ひとりに対し、祖父江元理事長から修了証書が授与されました。

続いて、祖父江理事長から「特定行為研修修了者はこれからの医療を担っていく可能性が大いにあります。皆さまの益々のご活躍を期待しています。」との祝辞が述べられ式は終了しました。

＊高度実践看護師（診療看護師）コース修了後は、特定行為研修修了者として厚生労働省に報告します



授与式後の記念撮影

（38行為21区分）。また、一般社団法人日本NP教育大学院協議会が実施する「NP資格認定試験」の受験資格が得られます。

令和5年度医学研究科・看護学研究科統計セミナー開催

医学研究科及び看護学研究科の合同により、令和5年度は、計9回の統計セミナーが開催されました。

本セミナーは、臨床研究支援センターの大橋渉准教授を講師とし、医学研究科及び看護学研究科学生を中心に、病院職員を含めた全教職員を対象として、ZoomによりWeb開催されました。研究における統計学的分析手法の基礎知識を習得する講義・演習となっており、参加者からは、「具体例が多く、理解しやすかったです。」「相関係数の意味と、回帰式の因果関係について理解が深まりました。」などの感想がありました。

医学研究科及び看護学研究科では、今後も研究力



の向上を図っていきます。令和6年度も開催予定ですので、皆さまのご参加をお待ちしております。令和5年度の開催日及びテーマは、次のとおりです。

No.	日時	テーマ
1	4/26（水）18時～19時	統計学の基礎
2	5/23（火）18時～19時	医学研究と統計的検定
3	6/28（水）18時～19時	統計的検定（2）
4	8/30（水）18時～19時	後ろ向き研究の方法とルール
5	9/26（火）18時～19時	回帰と相関
6	10/24（火）18時～19時	ロジスティック回帰
7	11/28（火）18時～19時	生存時間解析
8	1/10（水）18時～19時	生存時間解析（2）
9	2/27（火）18時～19時	文字情報の解析（テキストマイニング）

愛知県と医療提供体制の確保のための医療措置協定締結

新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえ、国民の生命及び健康に重大な影響を与えるおそれがある感染症の発生及びまん延に備えることを目的として、令和4年12月に感染症法が改正されました。改正感染症法では、「都道府県知事は、平時に、新興感染症の対応を行う医療機関と協議を行い、感染症対応に係る協定を締結すること」が規定されています。

この規定に基づき、愛知県と本院との間で、医療提供体制の確保のため医療措置協定が締結されることとなり、令和6年3月26日（火）に愛知県庁において、協定締結式が行われました。愛知県からは、大村秀章知事が出席され、本学からは、道勇学病院



長が出席して締結式が行われました。【写真】

この協定では、新たな感染症流行時の病床の確保や医療従事者の派遣などについて取り決めていきます。

大学病院の中央診療部に新たな部門設置

肥満症治療センター

令和6年3月1日付けで、「肥満症治療センター」が新設されました。平成30年から消化器外科と糖尿病内科を中心に多くの診療部からの協力を仰ぎ、食事・運動療法、薬物療法と外科療法を含むチーム医療を進めて参りましたが、新センターの開設によって、これらの治療が一元化され、よりシームレスな診療を提供できるようになります。国内外で増加する肥満症や代謝異常症の患者への対応を強化し、効率的かつ効果的な患者サポート体制を構築します。

肥満症治療センター設立のメリットは、多岐にわ

肥満症治療センター・部長 神谷 英紀

たります。地域社会への貢献として、肥満症の啓発活動や患者支援を強化し、地域医療に貢献します。更に、肥満症の原因や治療法の研究を進め、その成果を社会に還元することで、肥満症の予防と治療の向上に寄与します。また、この活動を通じて、本院の肥満症治療への認知度が向上し、医療提供者同士の連携も強化されることが期待されます。この新センターにおいて、患者さん一人ひとりが健康保持・増進できるように目指していきます。

臨床遺伝診療部

本院に令和6年4月1日付けで、「臨床遺伝診療部」が設置されました。本院における遺伝に関する診療は平成13年からスタートし、遺伝性疾患に関する医療相談や診療需要は年々増加しています。扱われる遺伝情報は、医学的課題だけではなく、倫理的・法的・社会的課題も生じるものであるため、臨床遺伝専門医や遺伝カウンセラーを始めとした

臨床遺伝診療部・部長 中野 正吾

専門家を中心に院内全体で連携を取る必要があります。臨床遺伝診療部が設置されたことで、治療に関わる医療従事者及び診療科の枠を超えて更なる質の高い遺伝医療提供が期待できます。

今後も患者さんやご家族に適切な遺伝医療を提供できることを目指していきます。

名古屋ウィメンズマラソンにコンテナ医療ユニットを派遣

令和6年3月10日（日）名古屋市内で開催された名古屋ウィメンズマラソン2024に本院のコンテナ医療ユニット（CoMU®）が2機派遣されました。

コンテナ医療ユニットは2機ともにタイヤが付いたトレーラー型で、牽引車との連結で容易に移動が可能です。自家発電機を搭載し、ストレッチャーや車いすを搬入できるリフトを備え、内部には診察処置台やエコー、ベッドサイドモニター、AEDや手洗い装置も備えています。能登半島地震発災直後の令和6年1月7日（日）から被災地へ向けて出発し、約2か月間の活動期間を経て一度本院に帰還、メンテナンス後すぐに同イベントに出動しています。

大会当日コンテナ医療ユニットは、ランナーの発着場所となるバンテリンドーム敷地内に開設された第二救護所に設置され、救護所では、体調不良を訴える、処置が難しい6名のランナーを対応しました。

医療救護班として、現場を指揮した救急集中治療医学講座の渡邊栄三教授からは「CoMU®の中は空調完備され、感染にも配慮された構造となっています。そこでは、快適かつプライバシーも保たれる堅牢な環境で診療できます。これらの特徴は、能登でも大いに威力を発揮しました。そして、ランナーや観客の皆さんに起こり得るあらゆる傷病に対して、



第二救護所に設置されたコンテナ



体調不良者の対応に当たる渡邊教授と看護師

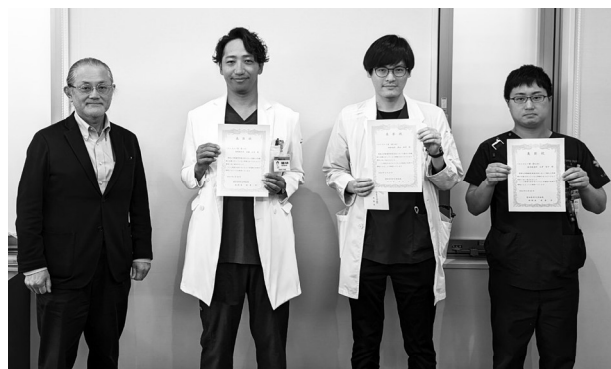
緊急初療が可能となっています。皆さんが安心してイベントを楽しめる環境を追求しつつ、より良い救急災害医療を提供できるよう今後も努めて参ります。」とのコメントがありました。

令和5年度ベストカルテ表彰式挙行

令和6年2月29日（木）に病院長室において、ベストカルテ賞の表彰式が行われ、令和5年度のカルテから選出された医師には道勇学病院長から表彰状が手渡されました。ベストカルテ賞は、診療各科で記載されたカルテを「チーム医療」、「医療安全」等の観点から評価し、他の模範となり得るものを選出し、特に優秀であると評価されたカルテを作成した医師を表彰する制度であり、令和2年度から導入されています。

良質な医療は優れた診療記載から始まります。近年ではカルテ開示の件数も増え、カルテ記載の重要性が増しています。表彰された医師のカルテ記載方法を模範とすることで、より適切なカルテ記載の能力向上への一助となると期待されます。

ベストカルテ賞を受賞した医師は、次のとおりです。



道勇病院長との記念撮影

- | | | |
|-----|--------------|--------------|
| 第1位 | 内科学講座（循環器内科） | 後藤礼司講師 |
| 第2位 | 放射線科 | 中野雄太助教（医員助教） |
| 第3位 | 神経内科 | 黒田典孝助教（医員助教） |
| | 救命救急科 | 石津啓介助教（専修医） |

卒後臨床研修修了証授与式挙行

令和6年3月5日（火）午後4時30分から大学本館711特別講義室において、卒後臨床研修修了証授与式が挙行されました。

式は、道勇学病院長を始め、祖父江元 学長、卒後臨床研修センターの中野正吾センター長及び副センター長等が出席の中、整然と且つ厳かに執り行われました。初めに、中野センター長から医科及び歯科それぞれの代表者1名に修了証が手渡されました。続いて、「コロナ禍にめげることなくチームで良く助け合った。専攻医となり、症例の経験のみではなく発表や論文に取り組んで欲しい。今まで以上に、患者さんファースト、そして患者さんから学ぶという姿勢を忘れないで欲しい。」との告辞がありました。その後、各出席者から祝辞がありました。

今回修了した研修医27名、研修歯科医2名のうち



授与式後の記念撮影

研修医21名、研修歯科医2名が本院の医師として、専門医や学位取得を目指すことになります。本院での臨床研修の経験を活かし、より一層精進されることが期待されます。

令和6年度新規採用職員ガイダンス開催

令和6年4月1日（月）に、本学新規採用病院職員（採用・帰局医師、臨床研修医、看護職員及び医療職員等）計359名を対象として、新規採用職員ガイダンスが開催されました。今回は、看護職員も対象とし行うこととしたため、大学本館たちばなホールと講義室合わせて3会場において行い、講義内容は事前に撮影した映像を視聴する形式としました。

このガイダンスは、平成22年度から医療安全を始めとする各部門の院内ルールの周知徹底を目的に開催しています。まず、道勇学病院長から「病院の概

要及び経営方針」の説明や新規採用職員に対するメッセージがあり、その後、各部門の責任者から主要部署の業務内容、医療安全管理、感染予防対策等の説明が行われました。どの講義も日常の診療業務に直ちに反映されるものばかりであり、参加した新規採用者は真剣な表情で受講していました。

今年度途中に採用される病院職員に対しても同様のガイダンスを行い、愛知医科大学病院の職員として必要な基本事項を習得した上で従事していただきたいと思います。

令和6年度臨床研修医ガイダンス開催

令和6年4月1日（月）から8日（月）まで、新規採用研修医30名及び研修歯科医3名を対象に、本院における臨床研修に必要な基本的な事項についての「臨床研修医ガイダンス」が開催されました。

ガイダンスは、卒後臨床研修センターの中野正吾センター長から、医師としての心構え等についての講話から始まりました。続いて、加納秀紀副センター長の指導の下BLS講習会が行われ、救命救急についての指導がありました。また、看護部の大高通代看

護師長を中心とした感染管理室による感染予防演習や、臨床工学部による各種医療機器の使用方法などの演習が行われたほか、研修医向けにローテイト予定の診療科紹介の時間が設けられ、希望のあった19診療科がそれぞれの診療科の特徴や指導内容について紹介しました。

このガイダンス内容は、研修医にとって将来必ず役立つものと期待されます。

看護師・看護補助者（昼間・夜間）の協働と人材活用についての講演会開催

令和6年3月14日（木）大学本館303講義室において、看護部主催、診療支援課共催のもと「看護師と看護補助者（昼間・夜間）の協働と人材活用について」をテーマに講演会が開催されました。講演会には看護師長、主任を中心に78名が参加しました。

講演会では、医療法人社団白梅会理事の小林利彦先生を講師にお招きし、医療を取り巻く社会情勢や本院の看護補助者の体制を踏まえた上で、看護師と看護補助者との関係やタスク・シフト／シェアに向けた課題、看護補助者の確保・定着に向けた取り組みについて、意見交換を交えながら講演をしていただきました。

研修後のアンケートでは「看護の質の維持のために組織だけでなく医療界全体でタスク・シフト／シェアが必要と感じた。」、「もっとICTを活用した



小林先生による講演会の様子

い。」、「看護補助者の責任や、やりがいの向上のために職位を設けるなど参考になった。」などの意見がありました。看護補助者の更なる人材活用に向けた取り組みの方向性を学ぶことができました。

令和5年度第1回本院看護師特定行為研修シンポジウム開催

本院は、令和2年度に特定行為に係る看護師の研修制度の指定研修機関となり、多くの特定行為修了者を輩出してきました。

令和6年3月23日（土）午後1時から、シミュレーションセンターにおいて、第1回愛知医科大学病院看護師特定行為研修シンポジウム「特定行為研修修了者が実践する協働を考える～多様化する看護実践の追求～」が2部構成で開催され、129名と多くの方が参加しました。

第1部は、関東中央病院急性・重症患者看護専門看護師／特定行為研修修了者の齋藤大輔氏を招き、「私たちはどのような看護を描くべきか～看護師×特定行為を改めて考える～」をテーマとして、看護実践の中に特定行為をどのように活かしていくのか、また、組織における特定行為研修修了者の活用についてご講演いただきました。第2部は、「特定行為研修修了者とCN／CNS／NPの協働」をテーマに、



ディスカッションの様子

本院特定行為研修修了者の地搦真太氏、一宮市立市民病院クリティカルケア認定看護師の松井智子氏、本院診療看護師（NP）の田中千晶氏、本院急性・重症患者看護専門看護師／特定行為研修修了者の柳瀬圭司氏の4名の看護師から、それぞれの立場から協働した実践についての発表があり、その後、ディスカッションが行われました。第1部・第2部ともに、看護実践について深く考える機会となりました。

令和6年度のシンポジウムも、多くの方が参加できるような興味あるテーマでの開催を目指します。

令和6年度看護師特定行為研修開講式挙行

令和6年4月4日（木）午後1時30分から大学本館711特別講義室において、看護師特定行為研修の令和6年度開講式が挙行され、20名の受講生が参加しました。

本院は、令和2年度から看護師特定行為研修の指定研修機関として厚生労働省の認可を受け、現在はクリティカル領域、創傷管理領域、ジェネラル領域の3領域を開講しています。本院の特定行為研修は、急性期医療に加えて在宅医療、地域医療までを支えることができる人材及び地域・施設間の連携に参画できる人材育成を目指しています。

開講式では、道勇学病院長から激励の言葉があり、看護師特定行為研修管理委員会の井上里恵委員長からは、看護師の役割拡大が求められる中で、特定行



開講式後の記念撮影

為が担う役割や期待されることについて伝えられました。受講生は凛とした表情で式に臨み、特定行為研修を通して高度な看護実践を身に付け、社会に貢献できる看護師を目指すという意気込みがうかがえました。

若葉ナース卒業式挙行

令和6年2月28日（水）大学本館たちばなホールにおいて、若葉ナース卒業式が挙行されました。前年度に引き続き、感染症対策として出席者を若葉ナースと新人教育担当者に限定して行いました。部署から成長のお祝いと労いをメッセージスライドとして映し、厳かに温かい卒業式となりました。

この式は、今年度で14回目となり、入職した新卒看護職員が1年間を振り返るとともに、指導に携わった全ての先輩と互いに成長を祝う会となっています。国家試験を取得し、初めて本院に入職した新卒看護職員「若葉ナース」は、名札に初心者マークを付けて看護実践に携わっていますが、この卒業式をもって初心者マークから卒業しました。

式では井上里恵看護部長から新しい名札とともに若葉ナースコース研修を終えて、初めてのクリニカルラダー（JNAラダー統合版）I認定証が手渡され、新人教育担当者には労いの言葉が掛けられました。

部署では卒業を迎えた若葉ナースと指導をした看



井上看護部長による認定証授与



指導に携わった看護師からの言葉

護師、責任者とともに1年間を振り返り、若葉ナースの成長をともに喜び分かち合いました。

令和5年度看護師特定行為研修修了証授与式挙行

令和6年3月12日（火）午後3時から大学本館たちばなホールにおいて、看護師特定行為研修修了証授与式が挙行されました。

本院では、特定行為研修指定医療機関として厚生労働省の認可を受け、令和2年度から看護師特定行為研修を開講しています。院外からの受講生を含むクリティカル領域9名、創傷管理領域8名、ジェネラル領域8名の計25名が、講義、演習、OSCE、病院実習を経て、無事に修了することができました。式では、看護師特定行為研修管理委員会の井上里恵委員長から修了証が手渡され、道勇学病院長から今後の活躍を期待する激励の言葉がありました。

特定行為研修を修了した看護師は、医師と治療方針の確認を行い、患者の状態を見極め、手順書によっ



修了者との記念撮影

て特定行為を実施することができます。患者の状態に合わせ、タイムリーに必要な医療行為を行うことで、安心し、満足していただける医療・看護が提供できることを目指していきます。

メディカルセンター令和5年度防災訓練実施

愛知医科大学メディカルセンターにおいて、令和5年度第1回防災訓練が令和5年9月7日（木）に、第2回が令和6年3月12日（火）から22日（金）にかけて実施されました。例年、第1回の防災訓練では日中に発災したことを想定した防災訓練が行われ、第2回には夜間・休日を想定した避難訓練が行われています。

令和5年度第2回の訓練では、全部署の業務状況の把握や問題発生時の対応を行っている時間外の管理師長が不在となる午後9時以降の発災を想定して訓練が行われました。また、訓練の開催規模を各病棟単位及び外来に狭めて「初動被害確認、通報、初期消火、避難誘導」を含めたシナリオをそれぞれの現場の特性を鑑みて作成し、実施されました。

当日参加者からは「少ないスタッフで全ての患者さんの安全確保を行うために、日頃から防災意識をもって業務に取り組みたい。」「事前に災害時に使用する物品等の配置を把握する必要がある。」といった声が聞かれました。

今後は、二次救急の受入病院として医師も含めた



病棟の被害状況報告の様子



エアストレッチャーによる搬送訓練

多職種が連携するなど、一層実効性の高い訓練の実施に努めて参ります。

眼科クリニックMiRAI令和5年度防災訓練実施

令和6年3月21日（木）に眼科クリニックMiRAIにおいて、防災訓練が実施されました。南海トラフ巨大地震発生時における名古屋市東区の予想震度である震度6弱の揺れにより、クリニック地下室で小火が発生したケースを想定し、災害が発生した際の各自の具体的な動きを確認することを目的としています。

当日は、眼科クリニックMiRAI消防計画に基づき作成された対応フローに則り訓練が行われ、訓練後は委託業者による避難経路の説明等についての講義が行われました。

また、訓練後の振り返りでは、「診察室側のバックヤードなどアナウンスが聞こえにくかった。」「階段を降りる際の患者誘導は不安定だった。」「クリニック内にいる患者数を正確に把握し、全員が避難できているか確認する方法を改めて検討したい。」等の意見がありました。



委託業者の講評を受けるクリニック職員
(患者役がマンションの住民代表)

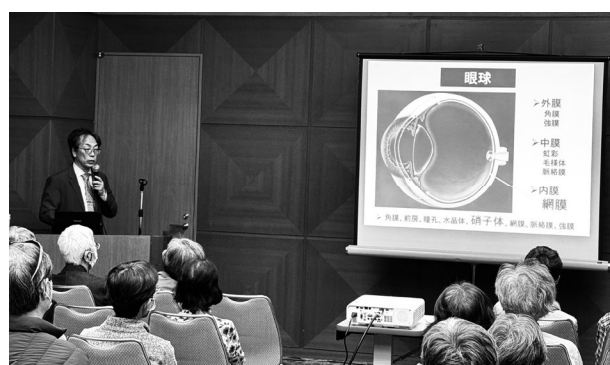
なお、本クリニックはマンション（東桜スカイハイツ）内にあることから、今回の防災訓練にはマンションの住民の方にも代表で2名の方にご参加いただきました。

火災発生時に職員が適切で円滑な対応ができるよう、今後もより一層実用性のある訓練の実施に努めて参ります。

眼科クリニックMiRAI市民公開講座開催

令和6年4月6日（土）メルパルク名古屋において、眼科クリニックMiRAI主催の市民公開講座「網膜・黄斑の病気で手術が必要と言われたら」が開催され、59名が参加しました。眼科学講座の瓶井資弘教授が講師として、黄斑変性を含む網膜疾患の手術に関する最新情報と治療方法について詳しく解説しました。

講演は1時間にわたり、瓶井教授から治療の選択や患者へのアプローチ方法についての説明があり、実際の症例を交えながら、最新の研究成果や治療法の進展についても紹介されました。本講演は、眼の病気についての理解を深める良い機会となり、参加者は具体的な治療法について知識を深めました。



瓶井教授による講演の様子

次回の市民公開講座は令和6年6月1日（土）に開催を予定しており、眼科の平井研登助教から「色々な網膜剥離」についての解説を行います。眼科クリニックMiRAIでは今後もこのような公開講座を通じて、地域住民への健康啓発活動を積極的に行っていく予定です。

愛知医大サービス株式会社 入学式にて特設売店出店

愛知医大サービス株式会社では、愛知医科大学オリジナルグッズを各種企画・販売しています。コロナ禍に入る前は、入学式、オープンキャンパス、医大祭、JAあいち尾東産直市場など、様々な行事に合わせて特設売店を出店していました。コロナ禍中は全く開催することができず寂しい限りでしたが、徐々に再開されることとなりました。

令和6年4月7日（日）には、満開の桜が咲き誇る中で入学式が行われ、同社から4年ぶりにオリジナルグッズ特設売店が出店されました。【写真】

初々しいスーツ姿の新生や保護者の方々が立ち寄り、本学のロゴマークやドクターヘリのイラストが入った文房具やお菓子などをご購入いただきました。このたびの出店は、同社の取り組みやオリジナルグッズを知っていただく良い機会となりました。



当日は、コロンバン製のオリジナルクッキーの詰合せが一番人気で、何箱もご購入いただいた方が多数いらっしゃいました。今後とも、皆さまの団らのひとときに、ご家族やお世話になった方へのお土産に、愛知医大サービスのオリジナルグッズをお役立てください。

緩和ケアセンター及び栄養治療支援センター 森 直治教授 小越章平記念 Best Paper of the Year 2023 受賞

緩和ケアセンター及び栄養治療支援センターの森直治教授が、令和6年2月16日（金）にパシフィコ横浜にて開催された、第39回日本臨床栄養代謝学会学術集会において「小越章平記念 Best Paper of the Year 2023」を受賞しました。

この賞は、会員数が23,000人を超える世界最大規模の臨床栄養の学術団体である日本臨床栄養代謝学会（JSPEN）から、年間で最も優れた論文に贈られる賞であり、森教授の論文「Prognostic implications of Global Leadership Initiative on Malnutrition criteria as a routine assessment modality for malnutrition in hospitalized patients at a university hospital」が高く評価されたものです。

受賞した森教授からは、「この度、わが国の臨床栄養領域の最高峰である本賞をいただき、大変光栄に思います。この論文は、本院の栄養サポートチー



記念の賞状及びクリスタルトロフィーを
贈呈される森教授（左）

ム活動を通じて得られた臨床データから、新しく世界標準となるGLIM基準による低栄養と生命予後との関連を検証したものです。今後の診療報酬改定にも影響を与える重要な研究として評価いただいております。本学の皆さまのご協力、ご支援の賜物であり、この場を借りて感謝申し上げます。」との感想がありました。

臨床感染症学講座 三鴨 廣繁教授 令和6年度日本嫌気性菌感染症学会賞受賞

臨床感染症学講座の三鴨廣繁教授が、令和6年3月2日（土）に和歌山県立医科大学にて開催された、第53回日本嫌気性菌感染症学会総会・学術集会において「令和6年度日本嫌気性菌感染症学会賞」を受賞しました。

この賞は、日本嫌気性菌感染症学会の発展に寄与し、国内外で評価の高い名誉会員以外の日本嫌気性菌感染症学会正会員に対して授与されるものです。

受賞した三鴨教授からは、「この度、令和6年度日本嫌気性菌感染症学会賞を頂戴し、誠に光栄に思っております。私は平成2年から感染症領域の研究を始めましたが、主に嫌気性菌の病原性発現機序に関する基礎的・臨床的研究を遂行して参りました。その第一成果として、腔内嫌気性菌が早産と関係することを見出し、そのメカニズムについて明らかにしてきました。更に、代表的な嫌気性菌である *Prevotella* 属（特に、*Prevotella bivia*）、*Fusobacterium* 属（特に、*Fusobacterium nucleatum*、*Fusobacterium necrophorum*）、抗菌薬関連下痢症の代表的な原因菌である *Clostridioides difficile* に関して研究を進め



受賞された三鴨教授（左）

てきました。愛知医科大学に異動してからは、腸内細菌叢と各種疾患との関わりについての研究を進め、研究成果の一環として *Clostridium butyricum* に関していくつかの特許も取得しております。私とともに研究に携わってくれた先生方には衷心より感謝を申し上げます。私にとって嫌気性菌感染症研究はライフワークでもありますので、今後も精進していきたいと思っております。今後ともご支援の程よろしくお願い致します。」との感想がありました。

感染制御部 宮崎 成美臨床検査技師 令和5年度日本嫌気性菌感染症学会ジャーナル賞受賞

感染制御部の宮崎成美臨床検査技師が、令和6年3月2日（土）に和歌山県立医科大学にて開催された、第53回日本嫌気性菌感染症学会総会・学術集会において「令和5年度日本嫌気性菌感染症学会ジャーナル賞」を受賞しました。

この賞は、学会雑誌に投稿された原著、症例報告を審査対象として、「論文の構成、記述の適正さ」、「独創性」、「新規性」、「研究デザインまたは方法の妥当性」、「結果の妥当性」、「考察の妥当性」の観点から、審査、評価し、選考された著者に与えられるものであり、宮崎技師の論文「*Clostridioides difficile* に対する病室内次亜塩素酸水噴霧の有効性に関する検討」が高く評価されたものです。

受賞した宮崎技師からは、「この度は名誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。今回の表彰に当たりご指導いただいた多くの先生方に深く感謝申し



受賞された宮崎検査技師（左）

上げます。今後もなお一層精進して参りますので、引き続きご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。」との感想がありました。

事務職員資格・検定取得

学是「具眼考究」を踏まえたSD（スタッフ・ディベロップメント）実施に関する基本方針のもと、事務部門では、「具眼」にあたる具体的な取り組みとして、業務遂行に必要な知識習得に積極的に取り組んでいます。令和5年4月～令和6年3月までに、計10名の事務職員が、各担当業務に直結する資格・検定を受験し合格しました。

習得した知識・技能を業務へ活かしていただき、更なる自己研鑽によるステップアップが期待されます。



取得日	資格・検定名	所属・氏名	
R 5. 4. 30	Excel VBAスタンダード	経営戦略推進事務室	伊藤 友一 主事
R 5. 8. 8	ビジネス文書検定2級	管財・契約室	森 俊太 主事
R 5. 9. 13	初級SNSエキスパート検定 SNSリスクマネジメント検定	総務広報課	井戸 萌未 主事
R 5.11. 15	ITパスポート	人事・厚生室	山口 智之 主任
R 5.12. 6	第2種滅菌技士	メディカルセンター事務部 病院管理課	加藤 佑輝 主事
R 5.12. 8	倫理審査専門職CREP認定試験	庶務課	吉田 友美 主任
R 6. 1. 9	ビジネス文書検定3級	総務・秘書室	川邊 健太 主事
R 6. 1. 18	ITパスポート	医事管理部	増田 阿耶 主任
R 6. 3. 23	Microsoft Office Specialist Excel 2019	医事課	清水 葵 主事
R 6. 3. 30	Microsoft Office Specialist Excel 2019 Expert	医療情報管理課	是木 悟 主事

※資格取得当時の所属と役職を記載

令和6年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構 委託研究開発契約の締結

令和6年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構委託研究課題が採択され、次のとおり研究契約を締結しました。

(金額単位：円)

研究事業名	研究開発担当者	委託研究開発費	研究開発課題名
医療機器等研究成果展開事業	井 上 匡 央 医 学 部 内科学 (肝胆膵内科), 准教授	26,000,000	内視鏡的胆管内バルーンアブレーション治療に関する研究開発
次世代がん医療加速化研究事業	丸 山 健 太 医 学 部 薬 理 学, 教 授	13,000,000	Piczolシグナルによる大腸癌の進展制御に関する研究開発
再生・細胞医療・遺伝子治療実現加速化プログラム	岡 田 洋 平 加齢医科学研究所 神経 iPS 細胞研究部門 教 授	39,000,000	運動ニューロン疾患におけるシナプスを介した神経変性機構の解明
肝炎等克服実用化研究事業 B型肝炎創薬実用化等研究事業	伊 藤 清 顕 医 学 部 内科学 (肝胆膵内科), 教授	75,400,000	未感染肝細胞への感染制御によりHBV排除を可能にする新規薬剤開発
創薬基盤推進研究事業	祖 父 江 元 学 部 元 長	36,900,000	筋萎縮性側索硬化症の大規模患者レジストリと患者iPS細胞を活用した産学共同新規創薬開発研究 (AMED拠出分)
創薬基盤推進研究事業	祖 父 江 元 学 部 元 長	22,000,000	筋萎縮性側索硬化症の大規模患者レジストリと患者iPS細胞を活用した産学共同新規創薬開発研究 (企業拠出分)
脳神経科学統合プログラム	祖 父 江 元 学 部 元 長	91,000,000	孤発性筋萎縮性側索硬化症の双方向トランスレーショナル研究による病態介入標的の同定と核酸医薬の開発研究

- ・ 令和6年4月30日までの日本医療研究開発機構委託研究の代表課題を記載。
- ・ 委託研究開発費は、他機関への再委託費及び間接経費を含む。

学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



石田 雄一郎

学位授与番号 甲670号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「En Face OCT Detects Preretinal Abnormal Tissues

Before and After Internal Limiting Membrane Peeling in Eyes with Macular Hole (En Face OCTによる黄斑円孔に対する内境界膜剥離前後の網膜前異常組織の検討)」



岡田 浩章

学位授与番号 甲671号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「Evaluation of virtual monochromatic imaging with dual-

energy computed tomography of small liver metastases from malignant abdominal tumours: Quantitative and qualitative analyses (Dual Energy CTから作成される仮想単色X線画像を用いた腹部悪性腫瘍の小型転移性肝腫瘍における定性的・定量的分析)」



加藤 三香子

学位授与番号 甲672号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「PDZ-binding kinase inhibitor OTS514 suppresses the

proliferation of oral squamous carcinoma cells (PDZ-binding kinase阻害剤のOTS514は口腔扁平上皮癌細胞の増殖を抑制する)」



木全 健太郎

学位授与番号 甲673号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「Relationship between attachment site of tibialis anterior

muscle and shape of tibia: anatomical study of cadavers (前脛骨筋の付着部位と脛骨の形態の関係: 解剖学的研究)」



永井 修平

学位授与番号 甲674号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「The Relationship between Numbness and Quality of

Life (しびれとQOLの関係性)」



Muhammad Nazmul Hasan

学位授与番号 甲675号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「Flow cytometry-based quantification of genome editing

efficiency in human cell lines using the *LICAM* gene (LICAM遺伝子を用いたヒト細胞株におけるゲノム編集効率のフローサイトメトリーによる定量)」



岸野 孝昭

学位授与番号 甲676号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「Usefulness of serum procalcitonin for necrotizing

fasciitis as an early diagnostic tool (壊死性筋膜炎の早期診断ツールとしての血清プロカルシトニンの有用性)」



豊國 賢治

学位授与番号 甲677号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「Influence of household pet ownership and filaggrin loss-of-

function mutations on eczema prevalence in children: a birth cohort study (家庭内でのペット飼育とフィラグリン機能喪失変異が児の湿疹発症に及ぼす影響：出生コホート研究)」



石田 優利亜

学位授与番号 甲678号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「Association of body mass index and weight change

with death in patients with advanced cancer (進行癌患者における体格指数と体重変化と死亡との関連性)」



永野 彩乃

学位授与番号 甲679号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「Prevalence and Characteristics of the Course of

Dysphagia in Hospitalized Older Adults (入院高齢患者における摂食嚥下障害の有病率と経過の特徴)」



瀧川 友佳子

学位授与番号 甲680号

学位授与年月日 令和6年3月14日

論文題目：「The association between residual excessive

sleepiness and polysomnography parameters in patients with obstructive sleep apnea using oral appliances (閉塞性睡眠時無呼吸患者のOA治療における残遺眠気と睡眠検査パラメータの関連について)」



林 優佑

学位授与番号 甲681号

学位授与年月日 令和6年3月14日

論文題目：「A simplified electrophysiological approach

combining a point-of-care nerve conduction device and an electrocardiogram produces an accurate diagnosis of diabetic polyneuropathy (汎用性・客観性のある検査を用いた糖尿病性神経障害の診断の検討)」



横田 麻央

学位授与番号 甲682号

学位授与年月日 令和6年3月14日

論文題目：「Platelet-derived Growth Factor Activates Pericytes

in the Microvessels of Chronic Subdural Hematoma Outer Membranes (PDGFによる慢性硬膜下血腫外膜の微小血管における周皮細胞活性化)」



伊藤 貴至

学位授与番号 甲683号

学位授与年月日 令和6年3月14日

論文題目：「PTEN loss in intraductal carcinoma of the

prostate has low incidence in Japanese patients (日本人の前立腺導管内癌におけるPTEN欠失頻度は低い)」



山川 紀世志

学位授与番号 甲684号

学位授与年月日 令和6年3月21日

論文題目：「An exploratory study of neutrophil extracellular traps in

children with Kawasaki disease (川崎病の小児における好中球細胞外トラップの探索的研究)」



坪井 孝太郎

学位授与番号 乙427号

学位授与年月日 令和6年2月8日

論文題目:「Gap in Capillary Perfusion on Optical Coherence Tomography

Angiography Associated With Persistent Macular Edema in Branch Retinal Vein Occlusion (網膜静脈分枝閉塞症における, 光干渉断層血管造影による毛細血管循環の浅層と深層の差は遷延する黄斑浮腫と関連する)」



久野 晋平

学位授与番号 乙428号

学位授与年月日 令和6年2月29日

論文題目:「Impact of general anesthesia on ablation catheter

stability during pulmonary vein isolation based on a novel measurement approach (新しい測定方法に基づく, 肺静脈隔離中のカテーテルの安定性に与える全身麻酔の影響)」



沢田 博章

学位授与番号 乙429号

学位授与年月日 令和6年3月21日

論文題目:「Epidemiological Features and Clinical Presentations

of Acute Coronary Syndrome in Young Patients (若年性急性冠症候群の臨床的, 疫学的特徴)」



岡本 啓希

学位授与番号 乙430号

学位授与年月日 令和6年3月21日

論文題目:「Artesunate and cisplatin synergistically inhibit

HNSCC cell growth and promote apoptosis with artesunate-induced decreases in Rb and phosphorylated Rb levels (アルテスネートとシスプラチンは相乗的に頭頸部扁平上皮癌細胞の増殖を阻害し, アルテスネートにより誘導されるRbおよびリン酸化Rbレベルの低下によりアポトーシスを促進する)」

◆大学院看護学研究科



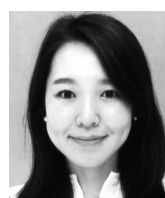
宮田 智子

学位授与番号 第172号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「教員が語る在宅看護の実践経験を活かしている在宅看護

教育」



黒田 愛理

学位授与番号 第173号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「なぜ父親は育児休業を取得するのかー育児休業前後の父親

の思いに着目してー」



佐藤 睦美

学位授与番号 第174号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「2歳児を育てている母親のしつけに対する思い」



西尾 和子

学位授与番号 第175号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「居住型継続支援の適応となった妊産婦への支援と課題」



飯田 仁斗

学位授与番号 第176号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「高度救命救急センターの救急外来に従事する看護師の惨事

ストレスとレジリエンスとの関連」



上里 佳那子

学位授与番号 第177号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目:「在日ベトナム人女性の妊娠期から育児期の体験とソーシャ

ル・ネットワーク」



川村 和代

学位授与番号 第178号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「看護師が認識する看護
管理者のリーダーシップとワーク・

エンゲージメントの関係に影響を与える心理的安全性と自己成長意識についての調査」



鈴木 陽介

学位授与番号 第183号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「背板の使用が胸骨圧迫
の深さ・リコイル・施行者の疲労度

に与える影響；マネキンによるシミュレーション研究」



木下 紀道

学位授与番号 第179号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「COVID-19パンデミック
初期において看護師が認識した看護

師長のリスクコミュニケーションに関する実態調査」



戸谷 信雄

学位授与番号 第184号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「診療看護師（NP）の在
宅の場での看取りに向けた看護実践」



後藤 秀徳

学位授与番号 第180号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「交通外傷患者の病院受
け入れ準備からPrimary Surveyに

至る診療看護師（NP）の臨床判断」



森本 由紀子

学位授与番号 第185号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「看護管理者および看護
師の情動知能と職場への感謝がモチ

ベーションに与える影響」



清水 薫

学位授与番号 第181号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「新人看護師のストレス
と働きやすさの関連」



米田 文明

学位授与番号 第186号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「Neonatal Intensive
Care Unitにおける新生児の気管吸

引に関するスコーピングレビュー」



鈴木 和代

学位授与番号 第182号

学位授与年月日 令和6年3月2日

論文題目：「看護ミドルマネージャー
の行動特性が組織学習に与える影響

－看護管理者のキーコンピテンシーと獲得への外的要因－」

外国人研究員のご紹介

本学において研修するため、外国人研究員としての来学された方をご紹介します。(敬称略)



サマタ シャルマ
Samata Sharma

国 籍：ネパール
現 職：小児科・眼科・耳鼻科・
リハビリ科病院，眼科コ
ンサルタント

受入講座：眼科学講座

受入期間：R6.2.1 ～ R6.4.30（3か月）

研究課題：上眼瞼における血管・リンパ管の解剖特
性の解明と，手術後の組織腫脹を最小限
に抑える手術方法の開発



ヌスラット ジャハン
Nushrat Jahan

国 籍：バングラデシュ
現 職：チッタゴン大学生物学部生
化学・分子生物学科，研究員

受入講座：生化学講座

受入期間：R6.4.1 ～ R7.3.31（12か月）

研究課題：パーシカンの生体内機能



ムハンマド ナズムル ハサン
Muhammad Nazmul Hasan

国 籍：バングラデシュ
現 職：チッタゴン大学生物学部生
化学・分子生物学科，研究員

受入講座：生化学講座

受入期間：R6.4.1 ～ R7.3.31（12か月）

研究課題：高性能ゲノム編集ツールの創薬を目指す
改良型prime editorの開発



オマール ラビー ハシム アル ダハン
Omar Rabee Hashim Al-Dahhan

国 籍：イラク
現 職：ファルージャ総合教育病院，
心臓血管外科部長

受入講座：外科学講座（血管外科）

受入期間：R6.4.1 ～ R6.5.2（1か月）

研究課題：静脈瘤の治療と診断



ゾホラ カトウン
Zohora Khatun

国 籍：バングラデシュ
現 職：チッタゴン大学，研究員

受入講座：加齢医科学研究所神経iPS細胞研究部門

受入期間：R6.4.1 ～ R7.3.31（12か月）

研究課題：iPS細胞を用いた神経変性疾患の病態解明

学 術 振 興

研究助成等採択者

◇公益財団法人堀科学芸術振興財団 研究助成

・氏 名 都築忍（生化学講座・教授
（特任））

研究題目 がん原性キナーゼ活性を利用
した，難治性白血病の治療

助成金額 10,000,000円

◇公益財団法人旭硝子財団 研究奨励

・氏 名 丸山健太（薬理学講座・教授）
研究題目 大腸菌由来細胞外分泌小胞に

よる癌進展制御学の創成と
応用

助成金額 3,000,000円

本学講座等の主催による学会等

【学会名】

- ・日本医学放射線学会第194回中部地方会／
日本核医学会第97回中部地方会／第73回中部IVR研究会
- ・第40回SAH／スパズム・シンポジウム

【開催日】

令和6年2月17日（土）・18日（日）

令和6年3月7日（木）

【会長等】

鈴木 耕次郎

大須賀 浩二

日本医学放射線学会第194回中部地方会／ 日本核医学会第97回中部地方会／第73回中部IVR研究会

放射線医学講座・教授 鈴木 耕次郎

令和6年2月17日（土）及び18日（日）名古屋国際会議場において、日本医学放射線学会第194回中部地方会・日本核医学会第97回中部地方会・第73回中部IVR研究会を開催致しました。この学会は、画像診断、核医学、IVR、放射線治療と放射医学の全領域の発表が同時に行われ、大変勉強になる学会です。近年は、現地とWebのハイブリッド形式で行われることもありますが、face to faceでのディスカッションや情報交換を重視したく、現地開催のみで行いました。

発表は全部で57演題あり、参加者は合わせて335名でした。初日はJR北陸線にアクシデントがあり、北陸からの参加者が発表時間に間に合わなくなる事態が生じましたが、その他は特に問題なく運営を行うことができました。また、本学の医局員と診療放射線技師も発表を行い、活発な質疑応答も行われました。

本学会の開催に当たり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会からご支援をいただきましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第40回SAH／スパズム・シンポジウム

病態治療学・教授 大須賀 浩二

令和6年3月7日（木）にパシフィコ横浜ノースにおいて、第40回SAH／スパズム・シンポジウムを開催致しました。本学会は、3月7日（木）～9日（土）まで日本脳卒中学会学術集会と日本脳卒中の外科学会学術集会との合同で、STROKE 2024として開催されました。

本学会のテーマは「脳卒中を変える～ We change stroke medicine and stroke medical care～」としました。くも膜下出血の治療法も、エンドセリンレセプター拮抗薬であるクラゾセンタンが投与可能となり、以前とは変わりつつある時代への移行期であることから、本学会においてその有効性や副作用などについて活発に討議されました。新型コロナウイルス感染症も5類感染症となり、医師5,196名並び



にパラメディカル参加は1,022名にもおよび、総勢7,426名もの多数の皆さまに参加していただくことができ、盛会裏に終了しました。

本学会の開催に当たり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会からのご支援をいただきましたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

生き抜くために必要な「考える力」

歯科口腔外科学講座・教授 風岡 宜暁

【医学教育のグローバルスタンダードを目指して】

生成AI（人工知能）時代の影響などから、医学教育のグローバルスタンダードは急速な変化が予想されています。特に、人生100年時代を迎え健康寿命の延伸が期待される中、良好な口腔環境の維持が全身の健康増進に繋がることが知られ、我々に求められる役割は大きく変化しています。口腔疾患の治療や口腔衛生管理に留まらず、口腔粘膜疾患の早期発見・治療、摂食嚥下機能の評価・リハビリテーション、誤嚥性肺炎の予防、咀嚼機能回復による栄養摂取の促進といった口腔機能の管理・維持・向上を適切に行えることが次世代に求められ、基礎疾患を有する高齢患者さんに対して自信を持って対応できる人材を育成することが重要であると考えています。

管理型臨床研修プログラム（1, 2年目: 初期研修）では、若手が多くの臨床経験を介して直接的に学ぶことを重視しており、早期に基本姿勢を身につけることを目指しています。医科大学における口腔外科である特色を活かし、全身的観点から口腔疾患の診断、治療に関する知識とスキルを体得するとともに、医療倫理の基本を修めることで、学ぶ意欲を引き出すことを最優先としています。

【世界に発信する医学研究】

後期研修プログラム（3～5年目）は、全員が社

会人大学院制度を採用しており、幅広い思考力を有することで、広く研究を発信できる環境を提供しています。口腔外科学のサブスペシャリティとしては、口腔悪性腫瘍、顎変形症、睡眠時無呼吸症候群、口腔インプラントなど多岐に及んでいます。

しかし、日本発の研究論文が主要国と比べ低迷していることが指摘されており、よく言われる「言葉の壁」や論文構成を組み立てるノウハウの欠如が挙げられています。台頭めざましいChatGPTなどの生成AIツールの活用を期待するのみならず、強調したい研究成果を印象的にアピールするなど、文字どおり日進月歩の勢いで進む研究環境を更に改善する必要が求められています。

【部署からの一言】

若い頃から、自覚を持ち積極的に学修し、他業種の医療スタッフと討議・連携し、病態判断・治療方針の立案・治療が行える能力を取得できることが目標であり、後期研修では多様な疾患を経験し多くの手術経験を積むことで専門性を習得することが可能です。

大学院進学を志す者に対しては、臨床経験の習得と併行し基礎研究や臨床研究を行うことで、幅広い思考力を有する医療人の集団としての講座を目指しています。



スタッフ集合写真



カンファレンスの様子

痛みをともに考え科学し、治療法の開発をめざす

疼痛医学講座・教授 牛田 享宏

【医学教育のグローバルスタンダードを目指して】

「痛み」は医療においても必ず存在するものですが、実臨床ではありふれた症状である故にしばしば軽くみられがちです。しかし、いざ自分が「痛み」を持ってしまうと非常に苦しく辛いものということは、医療者でなくても誰でも知っていることです。このような「痛み」について、国際疼痛学会は「実際の組織損傷もしくは組織損傷が起こりうる状態に付随する、或いはそれに似た、感覚かつ情動の不快な体験」と定義し、「痛み」が常に個人的な経験であり、生物学的、心理的、社会的要因によって様々な程度で影響を受けること、個人は人生での経験を通じて「痛み」の概念を学ぶことを言及しています。人生の楽しみを奪い取ってしまう「痛み」について、どのように向き合うのかは患者・医療人共通の重要な課題です。人それぞれ、病気・病態だけでなく、おかれた環境、それまでの経緯で「痛み」の苦しみは異なります。そのため、医療者は医学的に或いは心理社会的にどのようなメカニズムで痛みを生じ、苦しんでいるかを分析し、治療を考えていく必要があります。

痛み医療者の教育においては「痛み」は基本的に画像検査などで見えませんから、それに取り組むためには患者の「痛み」について科学的な分析をしつつ、共感する力を養成する必要があります。同時に色々な方向から患者を包み、癒やし、治療をしていく必要があると考えています。その実現のために私達は医師（運動器・整形、精神心理、麻酔・ブロック、自律神経）、歯科医師、看護師、公認心理師、理学療法士などからなる集学的なチームでともに考えていく医療に取り組むことを実践する必要があります。



カンファレンスの様子

ます。

また、疼痛治療は日進月歩で進んできており、新規薬剤、先端の機器を使ったパルス高周波ブロックや脊髄刺激などの治療を学び応用することが重要です。同時にメディカルアーツとして人の心に寄り添い、その認知を変え行動を変えることで治療を行う能力の向上も大切です。我々のチームで学ぶ医療者・医学生達にはこれらを学んで貰い、広い分野で「痛み」に苦しむ患者さんを救ってほしいと願っています。

【世界に発信する医学研究】

疼痛研究は見えない痛みをどう分析していくかということ、生物心理社会モデルとしての痛みをどのように分析して治療を行うのが課題です。そのため、厚生労働研究としてICD-11の分類を用いた慢性疼痛患者の分析及び痛覚変調性疼痛を有する慢性疼痛患者の心理社会的背景の分析と社会復帰・居場所づくりを推進する研究、AMED研究としてVirtual Reality技術を用いて疑似疼痛を誘発させた際の脳・末梢・自律神経活動評価を進めています。

また、絆を形成するモデル動物を使った疼痛の情動研究、気象変化に関係する痛みの治療研究などを進めてきており、国際雑誌やIASPを始めとした国際学会での研究発表を推進しています。

【部署からの一言】

痛みを科学として学び、患者に共感し、治療できる医療人・研究者を育成することを目指しています。世界水準の研究を学びつつ教室内で研究に取り組み、難治性慢性疼痛に対する新しい外科的手技と投薬・運動療法を併せた独自の治療などを開発していくことを推進しています。同時にチームで構築した痛み医療の普及啓発を進めたいと考えています。



学生外来見学

～大学・病院を支える笑顔豊かなスタッフ陣～

「Smile ～スマイル～」では、大学・病院で活躍する職員の笑顔にスポットライトを当てて、各部署における活動内容や取り組み等について紹介致します。

医療情報部

医療情報部は、医療情報管理課と医療情報システム課の二つの部署で構成されており、日々の診療で用いるカルテを中心とした医療情報の管理を担当しています。

医療情報管理課では、医師記録、看護記録、手術記録、退院サマリーなどカルテの記載が不足なくなされているかをチェックし、必要に応じて記載者に対し追記や完成を依頼する量的監査業務や、医療記録としての質をチェックする質的監査業務を担当しています。特に、退院サマリーについては病院機能評価の認定要件として2週間以内に完成させることが求められているため、教職員の皆さまにおかれましてはご協力の程、よろしくお願い致します。

医療情報システム課では、電子カルテや部門システムの導入・維持・保守・点検等の業務を行っており、



医療情報部スタッフ集合写真

ITを用いた安全で効率的な医療を推進するための基盤を支える役割を果たしております。また、近年多発の医療機関を標的としたサイバー攻撃被害に対し、国のサイバーセキュリティ対策方針等が次々打ち出されていることから、研修会等を通じて一般職員の方にも、サイバーセキュリティに関するリテラシーの向上をお願いしています。

卒後臨床研修センター

平成16年4月の医師法改正により、大学附属病院及び厚生労働省が指定する臨床研修指定病院において、2年間の臨床実習が義務化されました。卒後臨床研修センター【写真】は、医師法改正に先立ち平成15年2月に設置されました。

研修医は1・2年次合計で約60名が在籍しており、中野正吾センター長の統括管理の下、各診療科をローテーションしながら研修します。センターの場所は、C棟10階にあり、個人用の机、ロッカー、共用の電子カルテ端末、文献検索・資料作成用パソコン、コピー機、シャワー室、仮眠ブースなどを備えています。

本センターはセンター長を始めとする計8名のス



タッフ教員、各診療科から1名ずつ選出されたセンター教員及び事務職員4名を中心に運営しています。月に一度、卒後臨床研修センター運営委員会を開催し、スタッフ教員及びセンター教員と今後の方針決定や課題の共有を行っています。

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

医師の働き方改革に係る関係規則の整備

医師の時間外労働上限規制の適用猶予期間終了に合わせ、本学独自の働き方改革を行うに当たり必要な事項を定めるため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年4月1日

【新規制定】

- ・学校法人愛知医科大学医師の働き方改革の実施に伴う臨床系教員の勤務時間等の特例に関する規程
- ・学校法人愛知医科大学変形労働時間制の運用基準に関する規程
- ・学校法人愛知医科大学ピーコング貸与要領

【一部改正】

- ・学校法人愛知医科大学就業規則
- ・学校法人愛知医科大学就業規則施行細則
- ・学校法人愛知医科大学給与規程
- ・学校法人愛知医科大学給与規程施行細則

「定年退職後に雇用する教育職員の分限等について」の一部改正

定年退職後に雇用する教育職員の分限等について（理事長裁定）の一部が改正され、特命教授及び特務教授の分限等が改められました。

施行日は令和6年4月1日

「再任用教育職員以外で雇用する場合の分限等について」の一部改正

再任用教育職員以外で雇用する場合の分限等について（理事長裁定）の一部が改正され、再任用期間満了後に雇用する教育職員の分限等について必要な事項が定められました。

施行日は令和6年4月1日

人を対象とする生命科学・医学系研究等に関する倫理規程の一部改正等

本学において審査対象とする研究に関する指針の追加及び名称変更に対応するため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年4月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学における人を対象とする生命科学・医学系研究等に関する倫理規程
- ・愛知医科大学医学部倫理審査実施規程
- ・愛知医科大学医学部倫理委員会規程
- ・倫理審査手数料の額について（理事長裁定）

共同研究規程の一部改正等

本学で行う共同研究及び受託研究に係る手続き等を改めるため、以下の関係規則が整備されました。

施行日は令和6年3月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学共同研究規程
- ・愛知医科大学受託研究規程
- ・共同研究費に係る管理経費等について（理事長裁定）

講座等受託事業取扱規程の制定等

講座等の各部署で行う講座等受託事業について必要な事項を定めるため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年4月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学講座等受託事業取扱規程
- ・愛知医科大学講座等受託事業費会計処理要項

教員の海外出張等に関する規程の一部改正

愛知医科大学教員の海外出張等に関する規程の一部が改正され、出張報告等の事務手続きが簡素化されました。

施行日は令和6年3月1日

医学部履修規程の一部改正等

不正行為等の内容の明確化、授業科目の新設、総合試験2の導入等に関し必要な事項を定めるため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年4月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学医学部履修規程
- ・愛知医科大学医学部進級認定に関する規程

医学研究科履修規程の一部改正

愛知医科大学大学院医学研究科履修規程の一部が改正され、履修コースとして新たに次世代がん医療コースが設置されました。

施行日は令和6年4月1日

看護学研究科博士課程設置に係る関係規則の整備

看護学研究科博士課程設置に伴い、学位授与手続き、長期履修制度、入学金減免等に関し必要な事項を定めるため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和7年4月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学学位規程
- ・愛知医科大学大学院看護学研究科長期履修制度規程
- ・看護学研究科学生の入学金の減免について（理事長裁定）

看護学研究科履修規程の一部改正

愛知医科大学大学院看護学研究科履修規程の一部が改正され、令和6年度入学生の授業科目、年次配当、単位数、専攻領域等、履修方法及び履修計画表が整備されました。

施行日は令和6年4月1日

肥満症治療センターの設置に係る関係規則の整備

中央診療部に新たに肥満症治療センターを設置するため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年3月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院肥満症治療センター規程
- ・愛知医科大学病院肥満症治療センター運営委員会規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院中央診療部に関する規程

臨床遺伝診療部設置に係る関係規則の整備

中央診療部に新たに臨床遺伝診療部を設置するため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年4月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院臨床遺伝診療部規程
- ・愛知医科大学病院臨床遺伝診療部運営委員会規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院中央診療部に関する規程

心不全包括管理センター設置に係る関係規則の整備

中央診療部に新たに心不全包括管理センターを設置するため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年5月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院心不全包括管理センター規程
- ・愛知医科大学病院心不全包括管理センター運営委員会規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院中央診療部に関する規程

医療連携センター運営委員会規程の一部改正

愛知医科大学病院医療連携センター運営委員会規程の一部が改正され、委員会の構成が改められました。

施行日は令和6年4月1日

メディカルセンター働き方改革推進委員会規程の制定

メディカルセンターにおける医療従事者の負担軽減及び処遇改善を図るため、愛知医科大学メディカルセンター働き方改革推進委員会規程が制定されました。

施行日は令和6年4月1日

メディカルセンター災害対策委員会規程の制定

メディカルセンターにおける防災及び災害体制の整備及び充実に図るため、愛知医科大学メディカルセンター災害対策委員会規程が制定されました。

施行日は令和6年4月1日

「メディカルセンター患者さん等からの投書の取扱いについて」の裁定

メディカルセンターにおける患者さん等からの投書を適切に処理するため、愛知医科大学メディカルセン

ター患者さん等からの投書の取扱いについて（病院長裁定）が整備されました。

施行日は令和6年2月1日

メディカルセンター院内感染対策に関する指針の制定等

メディカルセンターにおける院内感染対策の体制等に関し必要な事項を定めるため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年4月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学メディカルセンター院内感染対策に関する指針
- ・愛知医科大学メディカルセンター院内感染対策委員会規程
- ・愛知医科大学メディカルセンター感染制御チーム規程
- ・愛知医科大学メディカルセンター感染リンクスタッフ及び感染リンクスタッフ会議要綱

メディカルセンター褥瘡対策チーム規程の制定

メディカルセンターにおける褥瘡対策を効率的に推進し、的確な対応を図るため、愛知医科大学メディカルセンター褥瘡対策チーム規程が制定されました。

施行日は令和6年4月1日

メディカルセンター訪問看護ステーション運営規程（医療保健）の一部改正等

令和3年度介護報酬改定の経過措置終了に伴い、高齢者虐待防止のための措置に関する事項を追加するため、以下の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和6年4月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学メディカルセンター訪問看護ステーション運営規程（医療保険）
- ・愛知医科大学メディカルセンター訪問看護ステーション運営（介護保険）
- ・愛知医科大学メディカルセンター通所リハビリテーション事業所運営規程

眼科クリニックMiRAI電気保安規程の一部改正

愛知医科大学眼科クリニックMiRAI電気保安規程の一部が改正され、需要設備及び非常用予備発電装置の点検頻度が改められました。

施行日は令和6年4月1日

眼科クリニックMiRAI医薬品製造販売後調査実施要綱の一部改正

愛知医科大学眼科クリニックMiRAI医薬品製造販売後調査実施要綱の一部が改正され、調査対象を医療機器に拡充するために必要な事項が整備されました。

施行日は、令和6年4月1日



編 集 後 記

☆ コロナ禍前の形式で挙行されました令和6年度入学式（関連記事8頁）は、天候にも恵まれ満開の桜が入学生を迎える式となりました。一般財団法人愛知医科大学愛恵会による『立石池「桜」の整備事業』で植樹された桜の木も、既存の桜に負けない見事な花を咲かせました。

【総務広報課】

学報の送付を辞退される方は、総務広報課までご連絡ください。



X



Instagram

愛知医科大学公式SNS（@aichi_med_u）
では大学・病院の最新情報を発信中です。

愛知医科大学学報 第174号

発行年月日 令和6年4月30日

発 行 学校法人 愛知医科大学

発 行 人 祖父江 元

編 集 人 羽根田 雅巳

連 絡 先 〒480-1195

愛知県長久手市岩作雁又1番地1

愛知医科大学事務局総務部総務広報課

☎ (0561) 62-3311 (代表)

☎ (0561) 63-1063 (直通)